

貝塚市埋蔵文化財調査報告 第31集

## 木積觀音寺跡発掘調査概要

1993.9.30

貝塚市教育委員会

# はじめに

木積観音寺跡は本市を縦断して流れる近木川右岸の丘陵上、段丘から山間部に変化する地点に位置し、周辺は恵まれた自然環境を有する地域であります。寺域と推定しております地域は、鎌倉時代の建物と考えられる国宝観音堂が今も残り、また、その西には聖武天皇勅願により行基が創建したと伝えられる水間寺が存在し、古くから周辺の仏教の中心地的な様相を呈した地域であります。

今回、本遺跡の歴史の一端を明らかにする機会に恵まれ、また、本調査報告書として刊行するはこびとなりましたことは、過去の人々の暮らしを明らかにすることにおいて有意義なことと考えます。

本書の刊行にあたりまして、皆様の文化財に対するご理解を深めていただくとともに、文化財の保護・保存、研究の一助となれば幸いに存じます。

なお、調査並びに本書作成にあたり、関係各位には多大なご理解、ご協力を頂き、末筆ではありますがここに深く感謝の意を表します。

平成5年9月30日

貝塚市教育委員会

教育長 福井 昇彦

# 例　　言

1. 本書は、宗教法人孝恩寺代表役員田中典彦氏の依頼により、大阪府貝塚市木積地内において実施した、重要文化財仏像群収蔵庫建設工事に伴う木積観音寺跡の事前発掘調査の概要報告である。

2. 調査は確認調査を平成4年3月9日、10日にて実施し、本格的発掘調査を平成4年7月15日より8月31日にかけて実施した。

なお、内業調査は平成4年11月30日に終了した。

3. 調査にあたっては、宗教法人孝恩寺及び地元関係者より多大なご理解とご協力を賜った。記して感謝の意を表す。

4. 発掘調査は貝塚市教育委員会社会教育課学芸員前川浩一、三浦 基が担当した。

現地調査及び本書作成にかかる諸作業については下記の諸氏の参加を得て実施したものである。

木戸えり子　　岸本公輝　　高野洋一　　都川 剛　　藤井記代美　　森村紀代  
山本一吉

5. 本書の執筆は第1章を前川が、その他を三浦が担当し、編集は三浦が行った。

6. 遺物写真撮影は三浦が行った。

7. 出土遺物、調査記録は貝塚市教育委員会において保管している。

# 目 次

はじめに

例 言

目 次 (本文目次、図版目次、挿図目次)

第 1 章	調査に至る経過	1
第 2 章	位置と環境	3
第 3 章	調査成果	5
	1. 調査の概要	5
	2. 基本層序	6
	3. 検出遺構	6
	4. 出土遺物	20
第 4 章	まとめ	37

## 図版目次

- 図版1. 検出遺構  
調査区全景
- 図版2. 検出遺構
  - 1. 第1遺構面
  - 2. 同 上
- 図版3. 検出遺構
  - 1. 第1遺構面 東部
  - 2. 同 上
- 図版4. 検出遺構
  - 1. 第2遺構面
  - 2. 同 上 段上部
- 図版5. 検出遺構
  - 1. SE-201
  - 2. 同 上
- 図版6. 検出遺構
  - 1. SK-202
  - 2. 同 上
- 図版7. 検出遺構
  - 1. SD-202
  - 2. 同 上
- 図版8. 検出遺構
  - 1. SD-203
  - 2. 同 上
- 図版9. 検出遺構
  - 1. SX-213
  - 2. 同 上
- 図版10. 検出遺構
  - 1. SX-210、Pit-204
  - 2. Pit-204
- 図版11. 出土遺物  
SE-201 出土遺物
- 図版12. 出土遺物  
SE-201(8)、SD-201(40)、SD-202(16、19、62)  
SD-203(26、63)、SX-202(31) 出土遺物
- 図版13. 出土遺物  
SE-201(50)、SD-202(15、22)、SD-203(49)  
包含層第2層(48) 出土遺物

## 挿図目次

- 図1. 貝塚市遺跡分布図
- 図2. 調査地位置図
- 図3. 調査地地区割図
- 図4. 基本層序柱状図
- 図5. 第1遺構面遺構配置図
- 図6. 第2遺構面遺構配置図
- 図7. SE-201
- 図8. SK-202
- 図9. SD-201
- 図10. SD-202
- 図11. SE-201 出土土器
- 図12. SE-201 出土遺物
- 図13. SE-201 出土遺物
- 図14. SK-202 出土土器
- 図15. SD-202 出土遺物
- 図16. SD-202 出土遺物
- 図17. SD-203 出土土器
- 図18. SD-203 出土遺物
- 図19. SX-202 出土遺物
- 図20. SD-201 (40)、SX-209 (41)、SX-210 (38)、包含層第2層 (39、42) 出土土器
- 図21. 包含層第2層出土遺物
- 図22. 包含層第2層出土遺物
- 図23. 青磁
- 図24. SE-201 出土木製品
- 図25. SE-201 出土木製品
- 図26. SE-201 出土木製品
- 図27. SE-201 出土木製品
- 図28. SE-201 出土木製品

# 第1章 調査に至る経過

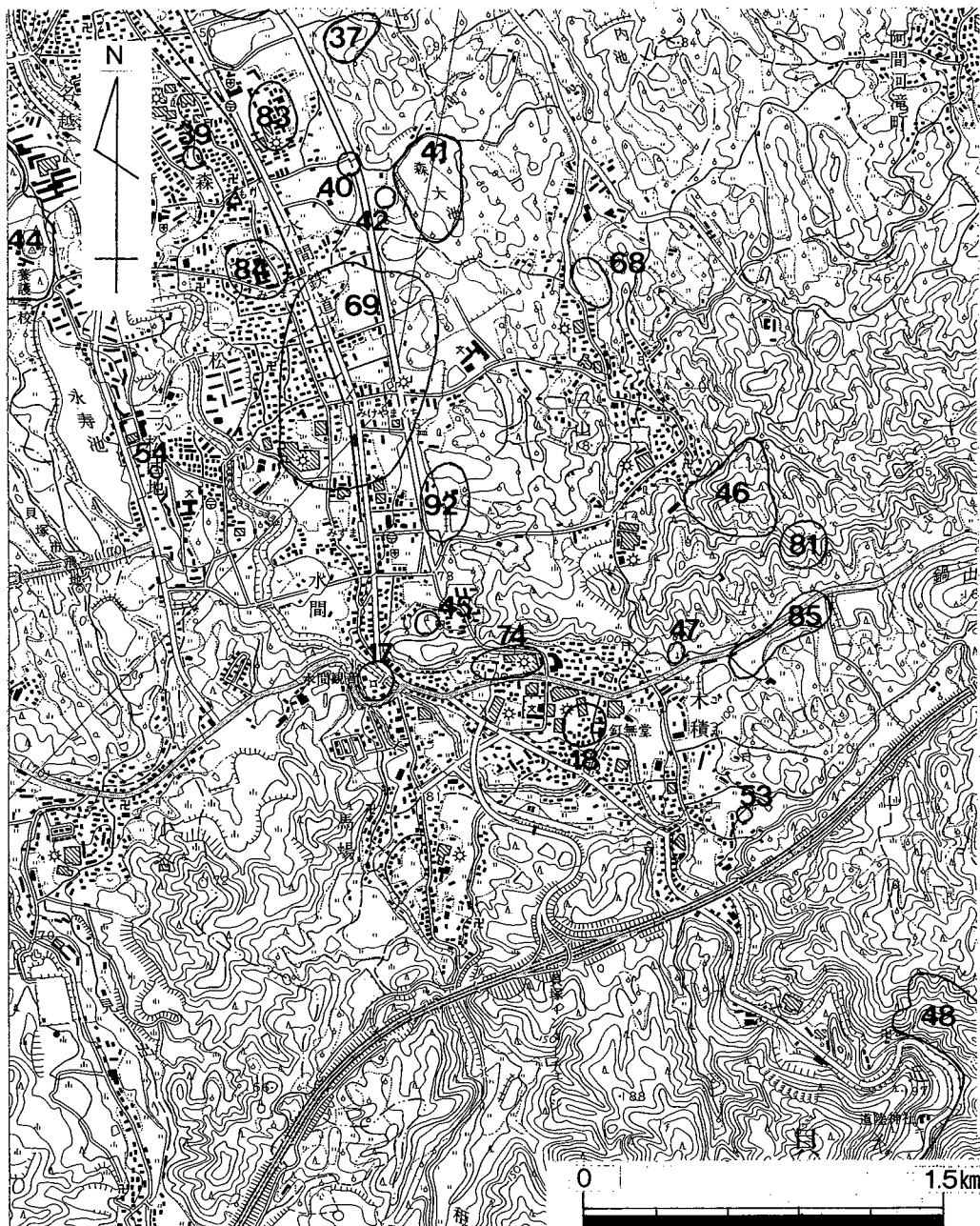
宗教法人孝恩寺では重要文化財に指定されている観音堂仏像群を専用収蔵庫にて保管していた。しかし、収蔵庫の老朽化が激しく、仏像群の保管が完全でなくなる事態が発生はじめていた。そこで国、府と仏像群保全のための方法を協議し、国庫補助金を受け収蔵庫を新たに建設することが内定した。建設予定地は孝恩寺の北東側畠地と決まり、孝恩寺と貝塚市教育委員会との間において、この建設に対する埋蔵文化財の取り扱いについて調整を開始した。

建設予定地は先述のとおり孝恩寺北東側隣の畠地となっている部分、周知の遺跡木積観音寺跡マーク地の東端部に位置する。本遺跡の調査例は少なく、寺院跡であったということ以外はその内容が不明なものであったが、建設地が国宝観音堂より約40mの地点であることから中世の遺構を検出することが推定できた。しかし、現状畠地の利用状況からは現代に大きく削平を受けている可能性が高いことが窺えた。このような状況であったため、確認調査を実施したうえで、遺構等の存在が明らかとなった場合、本格的発掘調査を実施することとなった。

確認調査は建設計画に基づき2ヶ所の調査区を設定し、平成4年3月9日、10日の2日間をかけ実施した。その結果、北側調査区から中世と思われる大形土坑を検出し、また、遺物包含層がほぼ全面に広がっていることが明らかとなった。

この結果をもとに、宗教法人孝恩寺と遺跡の取り扱いについて調整を重ねた結果、建設工事によって遺構を破壊する部分を最小限にするよう設計を一部変更した上で、変更不可能な部分の約440m<sup>2</sup>について本格的発掘調査を実施することとなった。

本格的発掘調査は平成4年7月15日から8月31日までの約2ヶ月をかけ実施した。また、8月28日に現地説明会を実施した。



17. 水間寺遺跡 18. 木積觀音寺跡 37. 集原池遺跡 39. 森城跡 40. 森B遺跡 41. 森ノ大池遺跡  
 42. 森A遺跡 44. 千石堀城跡 45. 水間墓地 46. 三ヶ山城跡 47. 片山墓地 48. 蛇谷城跡 53. 坊城  
 遺跡 54. 三ッ松遺跡 68. 三ヶ山遺跡 69. 三ヶ山西遺跡 74. 木積遺跡 81. 三ヶ山才二谷遺跡  
 83. 森下代遺跡 84. 三ッ松北垣外遺跡 85. 藥師池西遺跡 92. 橘池遺跡

図1. 貝塚市遺跡分布図

## 第2章 位置と環境

木積觀音寺跡は、国道170号線の通る谷部に位置し、市内南部の木積地区の中心部分である孝恩寺付近に位置すると推定される平安時代の寺院跡である。

調査地は、孝恩寺の北東に位置する近接した土地であり、周辺部は住宅・工場が密集する近木川の北岸に位置する。本調査地の標高は86mを測り、地形はほぼ平坦で近木川の流れる方向（西側）に向かって傾斜している。本調査地は、畠地で平坦部分の端に位置し河原との比高が約10mを測る。

周辺の遺跡としては、北側には中世の散布地である三ヶ山遺跡、中世の城跡の三ヶ山城跡、平安時代の集落跡と考えられる三ヶ山オニ谷遺跡、西に現在でも信仰の厚い平安時代の寺院跡である水間寺遺跡、中世の散布地である三ヶ山西遺跡、平安時代、中世の散布地である橘池遺跡、東に縄文時代、弥生時代、近世の散布地である薬師池西遺跡、南には中世の城跡である蛇谷城跡、根福寺城跡、舊原城跡が存在する。

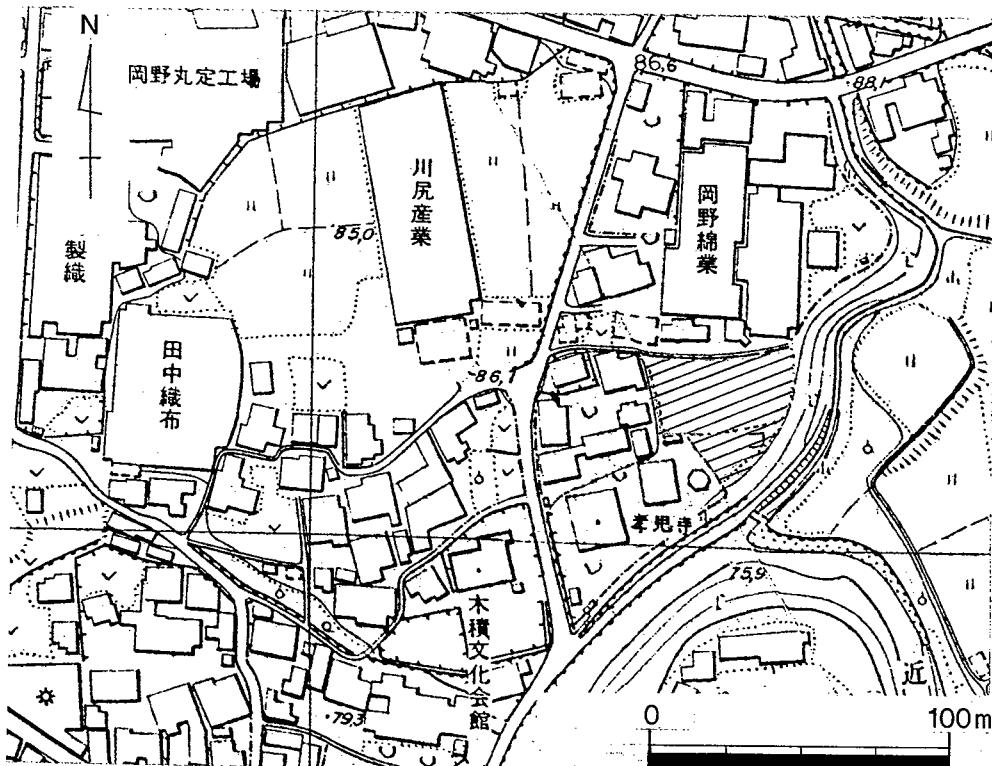


図2. 調査地位置図

周辺遺跡において時期的に重なる遺跡は三ヶ山オニ谷遺跡、橋池遺跡、水間寺遺跡の3カ所である。また、周辺で発掘調査が実施された遺跡は、三ヶ山西遺跡と三ヶ山オニ谷遺跡程度でありまだ不明な点が多い地域である。本遺跡は、1979年に1度調査がされているがそれ以後の調査例もなく現在に至っている。

本遺跡は、神亀3年（726）に行基の創建と伝えられる深谷山観音寺（木積観音寺）の推定地を遺跡としたものでこの観音寺は明治22年廃寺となり、大正3年に孝恩寺と合併している。俗称「釤無堂」として親しまれている観音堂は国宝に指定されており鎌倉時代後期の建物である。また、仏像群は重要文化財に指定されており平安時代のものである。

創建当時は、地域の信仰の一核を担っていたと考えられ、寺域もかなり広いものであったことが推定される。伽藍の配置などの史料は残っておらず遺跡の調査が待たれる遺跡である。

# 第3章 調査成果

## 1. 調査の概要

調査は建設設計画に基づき、予定地内に東西約17m、南北約27m、面積442m<sup>2</sup>の調査区を設定して実施した。

調査区において南北を基準とした5×5mの区画を用い、東西に5区画を設けA～E、南北に6区画を設け1～6とした。（図3）

調査では南側の攪乱を受けた部分以外の調査区全域において遺構を検出した。遺構面は第2層上面と地山上面の2面である。

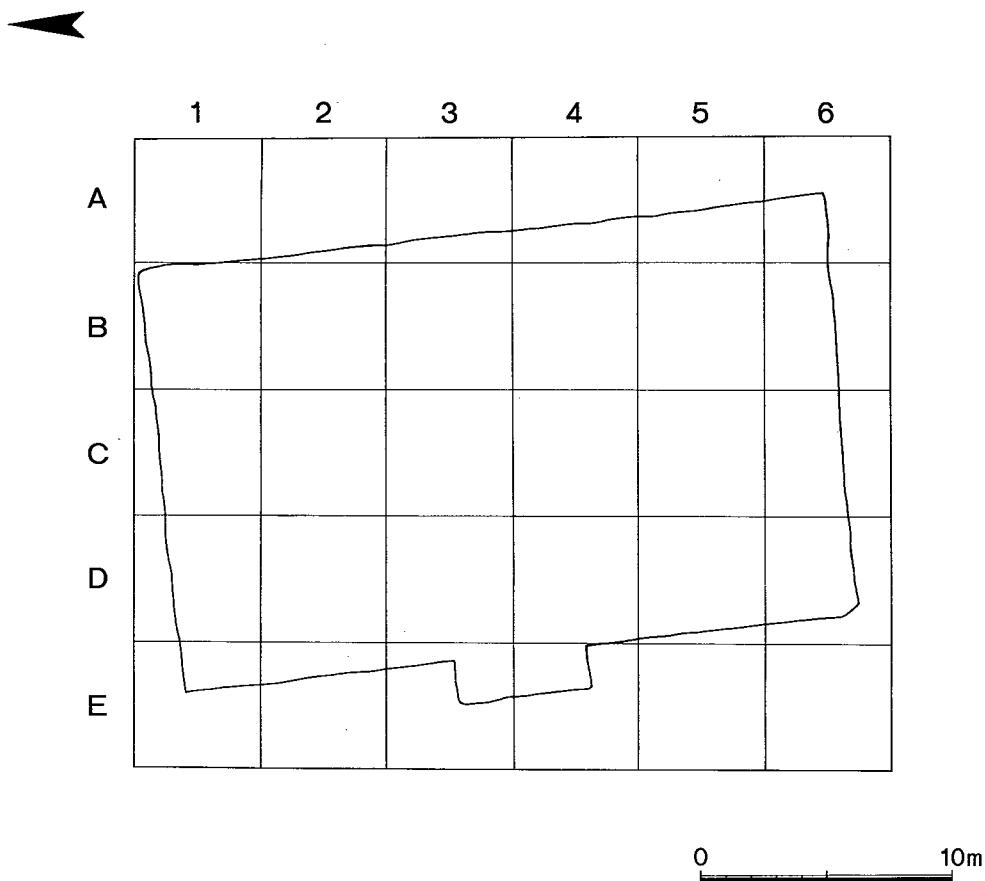


図3. 調査地地区割図

## 2. 基本層序

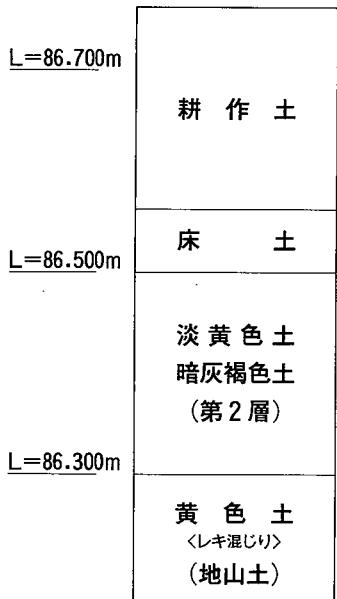


図4. 基本層序柱状図

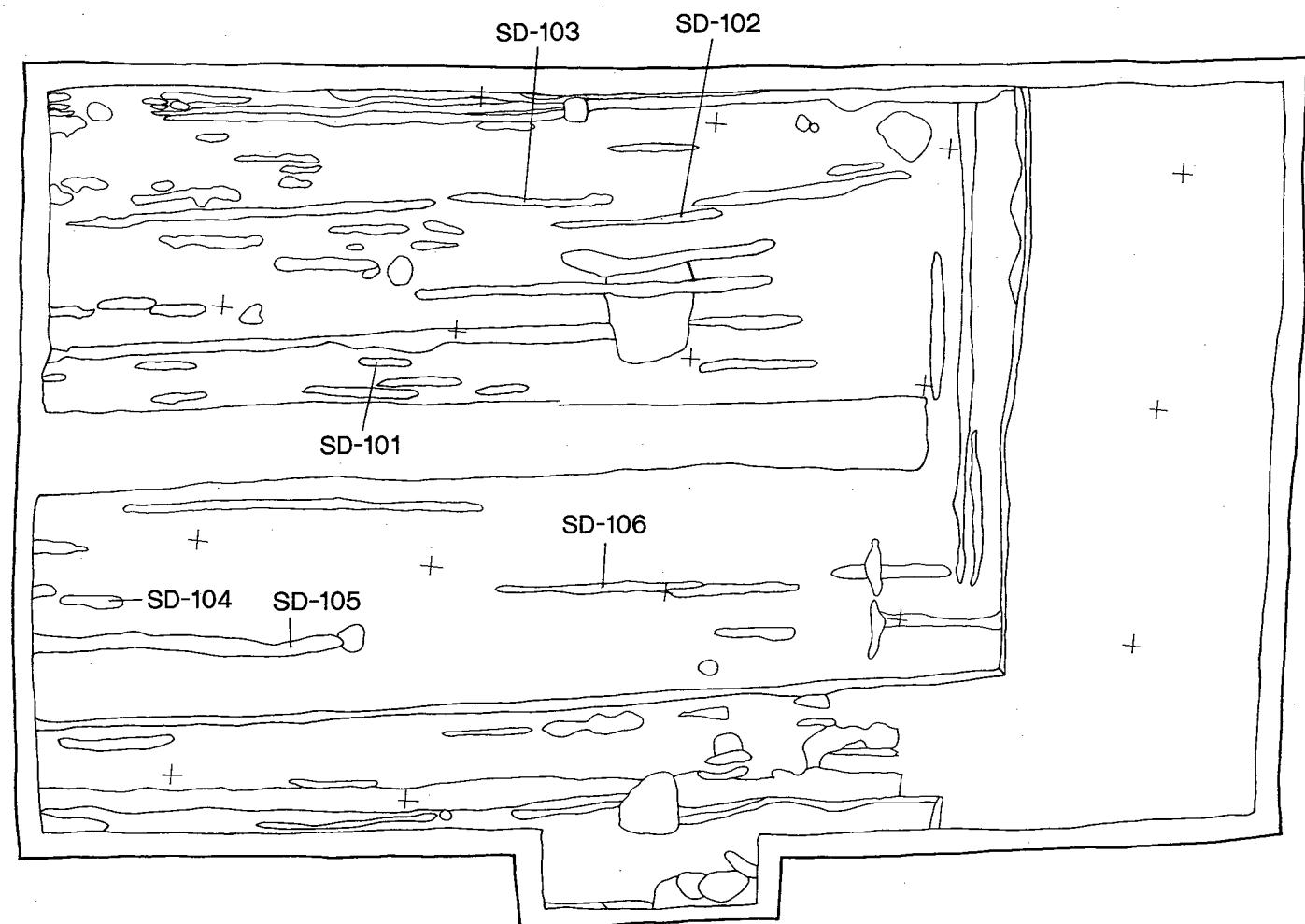
## 3. 検出遺構

本調査では、第2層と地山の上面で遺構検出を行った。その結果、南部で攢乱を受けた部分を除いてほぼ全域において遺構を検出した。第2層上面（第1遺構面）では近世と考えられるスキ溝を多数検出した。また、地山上面（第2遺構面）では、井戸、土坑、性格不明土坑、溝、柱穴などの遺構を良好な状態で検出した。

以下、各遺構面についてその概要を示す。

### 第1遺構面（図5、図版2・3）

検出遺構の多くが耕作に伴うスキ溝である。埋土は、暗灰色土（耕作土）のものと淡茶灰色土の2種類に分けることができ、前者は現代のものと考えられ、後者は近世のものと考えられる。その方向はほぼ全域で南北方向のものを検出しているほか、南部において東西方向のものを検出している。このことから、南部に攢乱を受けたためにできた段差があり一段低くなっている部分があるが、耕作地の境界部分となっているため、スキ溝の方向が変わっていると考えられる。遺物の出土している遺構は、南北方向のものだけで全体のほんの一部にすぎないが、主に耕作地として利用していたため出土遺物が少ないと考えら



0 10m

図5. 第1遺構面 遺構配置図

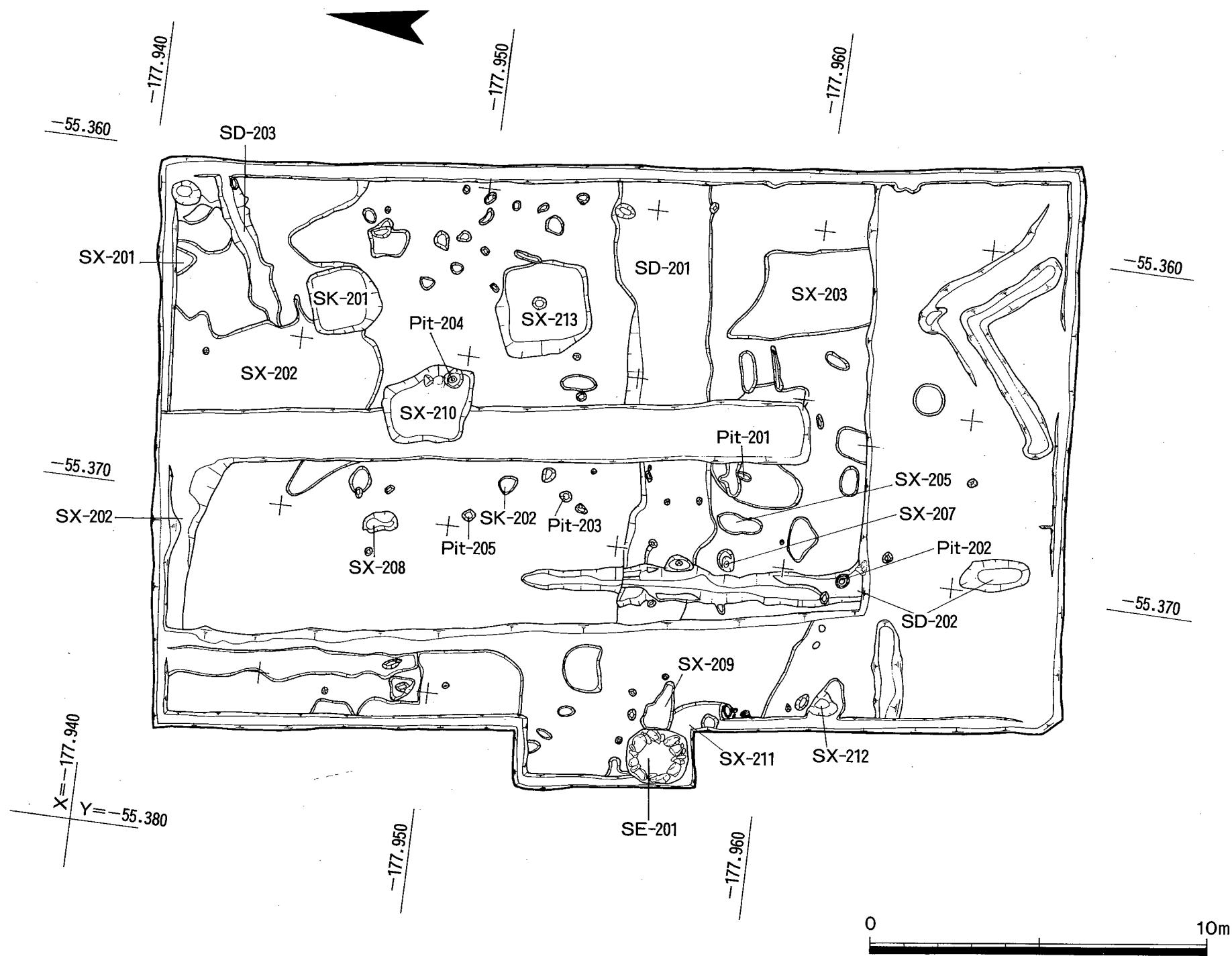


図6. 第2遺構面 遺構配置図

れる。

#### SD-101

本遺構はC-2区にて検出したスキ溝である。検出長 0.6m、幅約 0.2m、深さ 5 cmを測る。方向は南北方向で、埋土は淡茶灰色土である。出土遺物は焼土片である。

#### SD-102

本遺構はB-3区にて検出したスキ溝である。検出長 3.6m、最大幅約0.25m、深さ約 5 cmを測る。方向は南北方向で南側で幅が広がる。埋土は淡茶灰色土である。出土遺物は土師器片である。

#### SD-103

本遺構はC-2区にて検出したスキ溝である。検出長 3.5m、幅約0.15m、深さ 5 cmを測る。方向は南北方向で南側でやや曲がる。埋土は淡茶灰色土である。出土遺物は土師器片である。

#### SD-104

本遺構はD-1区にて検出したスキ溝である。検出長 1.3m、幅0.25m、深さ 5 cmを測る。方向は南北方向で、埋土は淡茶灰色土である。出土遺物は土師器片である。

#### SD-105

本遺構はD-1・2区にて検出したスキ溝である。調査区外に広がるため全体の規模は不明であるが、検出長 6.6m、幅約0.35m、深さ 5 cmを測る。方向は南北方向で、埋土は淡茶灰色土である。出土遺物は土師器片、瓦器片である。

#### SD-106

本遺構はD-3・4区にて検出したスキ溝である。検出長 4.5m、幅約 0.2m、深さ約 5 cmを測る。方向は南北方向で、埋土は淡茶灰色土である。出土遺物は土師器片である。

### 第2遺構面(図6、図版1、3~10)

遺構は、井戸1、土坑2、性格不明遺構12、溝3、柱穴5を検出している。南側の攢乱を受けている部分以外で遺構を検出しているが、調査区西側が一段低くなってしまっておりその部分は井戸以外浅い遺構しか存在していないほか、遺物は井戸の周辺から集中して出土している。特に井戸は上部が破壊されているものの良好な状態で検出しており大きな成果を上げることができた。

調査区中央部においては、比較的良好な状況で遺構を検出している。特に、溝からは土器、瓦等が多く出土しており興味深い。

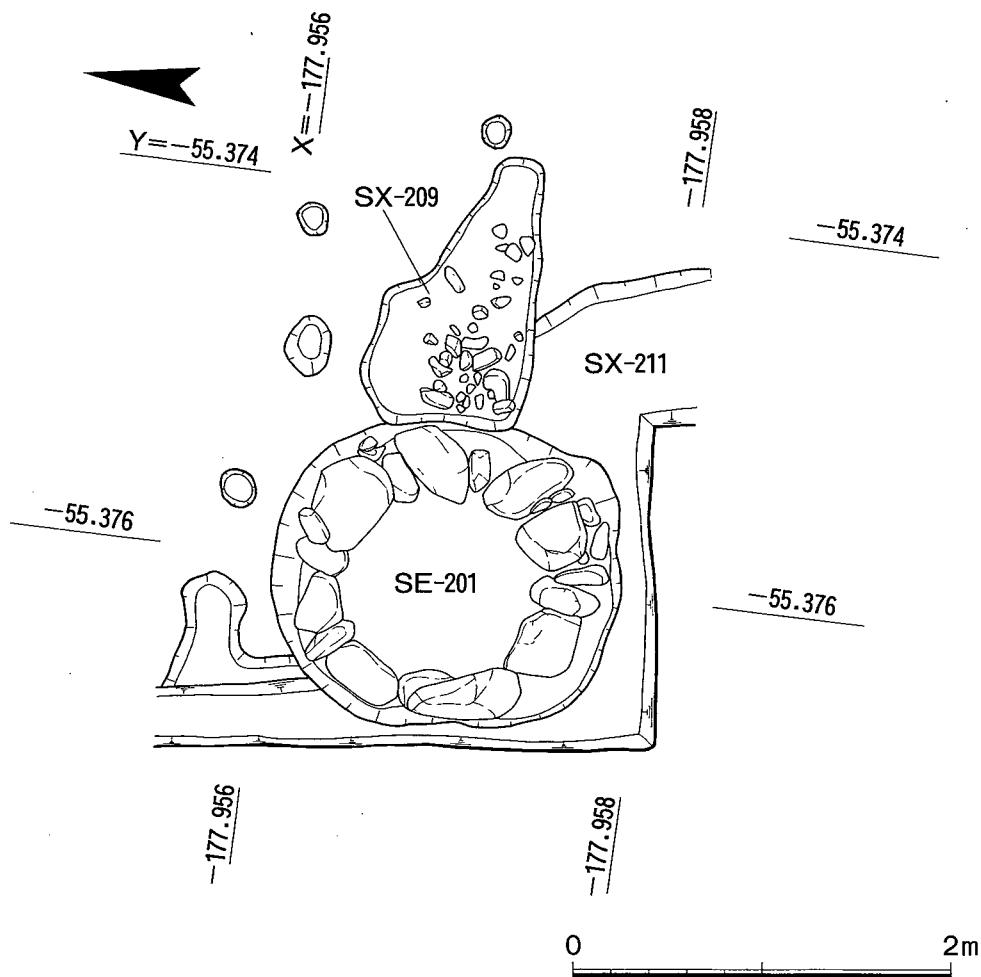
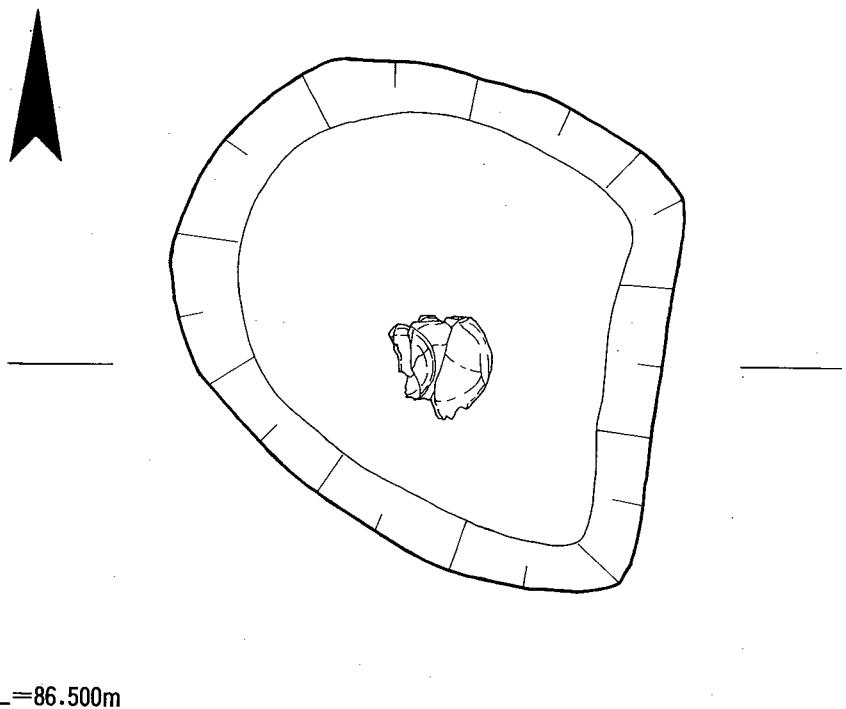


図7. SE-201

#### SE-201

本遺構はE-4区にて検出した井戸である。内径1~1.2m、掘方径1.8~1.9m、深さ約4mを測る。石組みの井戸で最大60cm程度の丸石を巧に組み上げている。遺構検出面より約1.2mのところまで井戸の側石と土で埋めている。遺物は、井戸埋め戻し土及び埋土から遺物が出土しており、瓦器椀、土師器小皿、瓦質羽釜、瓦質すり鉢、土師質すり鉢、青磁、平瓦、丸瓦片のほか漆塗り椀、曲げものなどの一部分と考えられる木製品の破片、竹、木片、桃などの種等が出土している。埋め戻し土は暗黄色土で、埋土は暗灰色土及び暗灰色砂である。遺構の時期は出土遺物から14~15世紀のものと考えられる。



L=86.500m

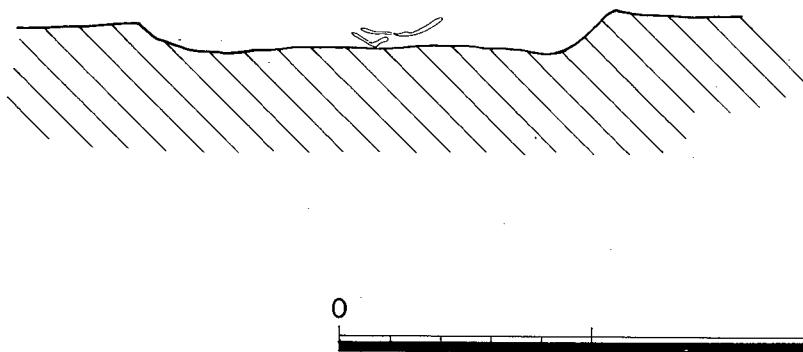


図8. SK-202

#### SK-201(図版9)

本遺構はB-2区にて検出した土坑である。隅丸の方形を呈し検出長 2.1m、深さ15cmを測る。埋土は暗灰褐色土で、遺物は土師器、須恵器、瓦器片が出土している。

#### SK-202(図8、図版6)

本遺構はC-3区にて検出した土坑である。不整形を呈し、長軸 0.5m、深さ 2~5cm

を測る。遺構中央部より土師器小皿片2点、瓦器椀1点が重なり合った状態で出土しておりその状況から何らかの祭祀を行ったことが考えられる。遺構周辺で建物跡が発見されていないが地鎮の可能性も考えられる。埋土は暗灰褐色土で、遺構の時期は出土遺物から14世紀ごろのものと考えられる。

#### SD-201 (図9)

本遺構はB～D-3・4区にて検出した溝である。調査区外に広がるため全体の規模は不明であるが、検出長13m、最大幅2.9m、深さ5～10mを測る。埋土は暗灰色土及び暗灰色砂で、遺物は土師器、須恵器、瓦器、瓦片が出土している。

#### SD-202 (図10、図版7)

本遺構はC・D-3～5区にて検出した溝である。検出長10m、最大幅0.8m、深さ30cmを測る。埋土は暗灰色土であり、遺物は瓦器、土師器、瓦、陶器片、砥石等が出土している。

#### SD-203 (図版8)

本遺構はB-1区にて検出した溝である。調査区外に広がるため全体の規模は不明であるが、検出長4.5m、最大幅0.6m、深さ10cmを測る。埋土は暗灰色土で、遺物は土師器、瓦器、軒丸瓦、丸瓦片が出土している。

#### SX-201

本遺構はB-1区にて検出した性格不明遺構である。調査区外に広がるため全体の規模は不明であるが、検出長0.6m、深さ10cmを測る。埋土は暗灰褐色土で、遺物は土師器、瓦器片が出土している。

#### SX-202

本遺構はB・C-1・2区にて検出した性格不明遺構である。調査区外に広がるため、また試掘坑に切られているため全体の規模は不明であるが、検出長6.2m、幅2.5m、深さ5cmを測る。埋土は暗灰褐色土で、遺物は土師器、瓦器片が出土している。

#### SX-203

本遺構はB-4・5区にて検出した性格不明遺構である。攪乱に切られているため全体の規模は不明であるが、検出長4.3m、幅2.4m、深さ5cmを測る。埋土は暗黄褐色土で、遺物は瓦器片が出土している。

#### SX-204

本遺構はC-5区にて検出した性格不明遺構である。攪乱に切られているため全体の規

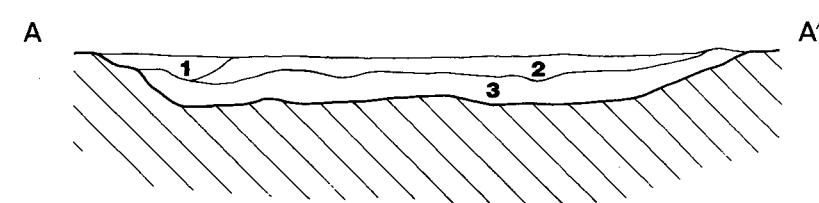
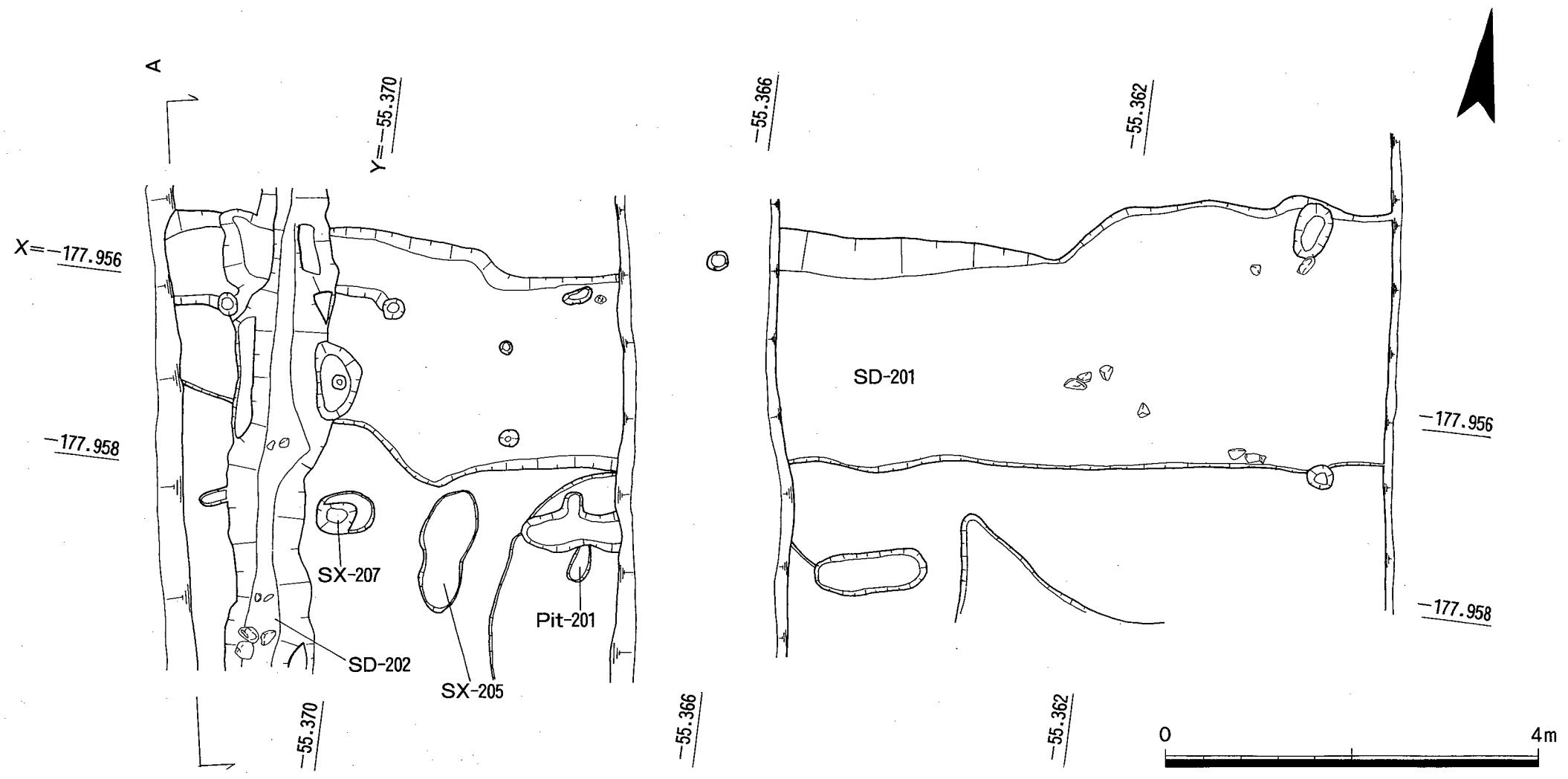


図9. SD-201



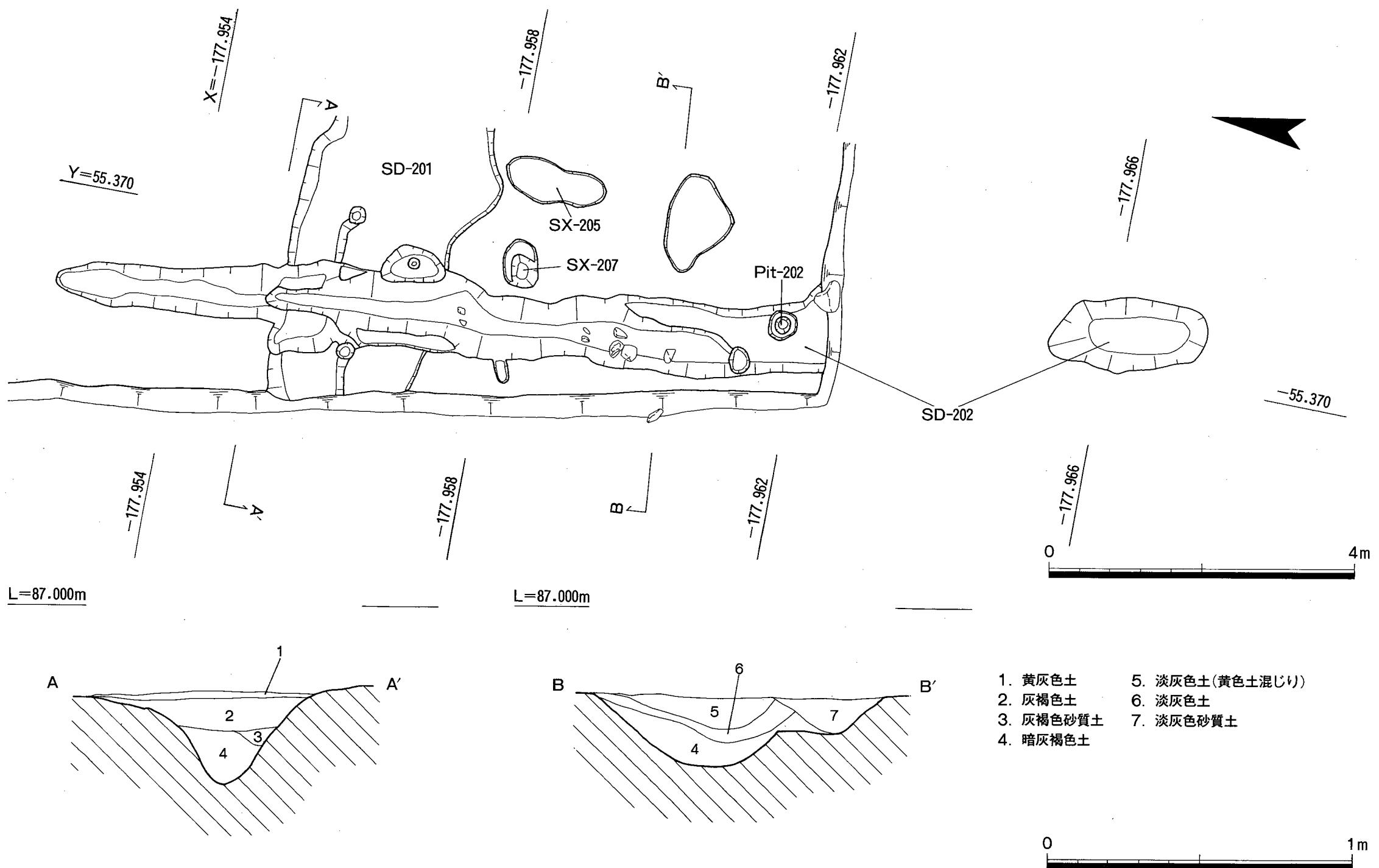


図10. SD-202

模は不明であるが、検出長 0.8m、幅 0.9m、深さ 3 cmを測る。埋土は暗黄褐色土で、遺物は土師器、瓦器片が出土している。

#### S X - 2 0 5

本遺構はC—4区にて検出した性格不明遺構である。検出長 1.3m、幅 0.5m、深さ約 5 cmを測る。埋土は暗灰褐色土で、遺物は土師器、瓦器片が出土している。

#### S X - 2 0 7

本遺構はC・D—4区にて検出した性格不明遺構である。直径 0.6m、深さ約 5 cmを測る。埋土は暗灰褐色土で、遺物は土師器、瓦器片が出土している。

#### S X - 2 0 8

本遺構はC・D—2区にて検出した性格不明遺構である。検出長 1 m、幅 0.6m、深さ 15cmを測る。埋土は暗灰褐色土で、遺物は土師器、瓦器片が出土している。

#### S X - 2 0 9

本遺構はD・E—4区にて検出した性格不明遺構である。S E—2 0 1に切られるため全体の規模は不明であるが検出長 1.4m、最大幅 0.9m、深さ 5 cmを測る。埋土は暗灰褐色土で、遺物は土師器、瓦器片が出土している。

#### S X - 2 1 0 (図版10)

本遺構はC—4区にて検出した性格不明遺構である。検出長 2.6m、幅 2.3m、深さ 20cmを測る。埋土は暗灰褐色土で、遺物は土師器、瓦器、瓦片が出土している。

#### S X - 2 1 1

本遺構はD—4区にて検出した性格不明遺構である。調査区外に広がるため、また他の遺構に切られるため全体の規模は不明であるが、検出長 0.5m、深さ 5 cmを測る。埋土は暗灰褐色土で、遺物は土師器、瓦器片が出土している。

#### S X - 2 1 2

本遺構はD—5区にて検出した性格不明遺構である。検出長 1.2m、幅 1 m、深さ 12cmを測る。埋土は暗灰褐色土で、遺物は土師器、瓦器片が出土している。

#### S X - 2 1 3 (図版 9)

本遺構はB—3区にて検出した性格不明遺構である。検出長 2.6m、幅 2.6m、深さ 約 12cmを測る。埋土は暗灰褐色土で、遺物は土師器、磁器片が出土している。

#### P i t - 2 0 1

本遺構はC—4区にて検出した柱穴である。他の遺構に切られるため、検出長 0.5m、

幅 0.2m、深さ 5 cmを測る。埋土は淡灰色で、遺物は焼土片が出土している。

#### P i t — 2 0 2

本遺構はD—5 区にて検出した柱穴である。直径 0.6m、深さ約 5 cmを測る。埋土は暗灰褐色土で、遺物は焼土片が出土している。

#### P i t — 2 0 3

本遺構はC—3 区にて検出した性格不明遺構である。直径 0.3m、深さ約 5 cmを測る。埋土は暗灰褐色土で、遺物は土師器片が出土している。

#### P i t — 2 0 4 (図版10)

本遺構はC—2 区にて検出した性格不明遺構である。直径 0.55 m、深さ約 20cmを測る。埋土は暗灰褐色土で、遺物は土師器、瓦器片が出土している。

#### P i t — 2 0 5

本遺構はC—3 区にて検出した性格不明遺構である。直径 0.4m、深さ約 5 cmを測る。埋土は暗灰褐色土で、遺物は土師器、瓦器片が出土している。

### 4. 出土遺物

本調査では主に中世の土器が出土している。第1 遺構面、包含層から出土した遺物は小片のため実測に耐えるものが少なかった。しかし、第2 遺構面において検出した遺構内から良好な状況で多くの遺物が出土している。遺物は主に瓦器、瓦、土師器が出土している。特に、S E—2 0 1 からは羽釜やすり鉢のほかに、漆椀、木製品、桃の種なども出土しており興味深いといえる。

以下、出土遺物について概要を示す。

#### S E—2 0 1 (図11~13、図版11~13)

1 ~ 6 は瓦質羽釜である。1 ~ 4 は口縁部がやや内彎しつつ短く立ち上がりを見せるのに対して 5 ~ 6 はまっすぐ長く立ち上がる。

1 は復元口径19.2cmを測る。調整は内面にハケメ、外面鍔部下にケズリを施し、口縁部はナデで仕上げる。2 は復元口径28.2cmを測る。調整は内面にハケメ、外面鍔部下にケズリを施し、口縁部はナデで仕上げる。3 は復元口径22cmを測る。調整は内面にハケメ、外面鍔部下にケズリを施し、口縁部はナデで仕上げる。4 は復元口径25.6cmを測る。調整は内面にハケメ、外面鍔部下にケズリを施し、口縁部はナデで仕上げる。

5 は復元口径25cmを測る。調整は内面にハケメ、外面鍔部下にケズリを施し、口縁部は

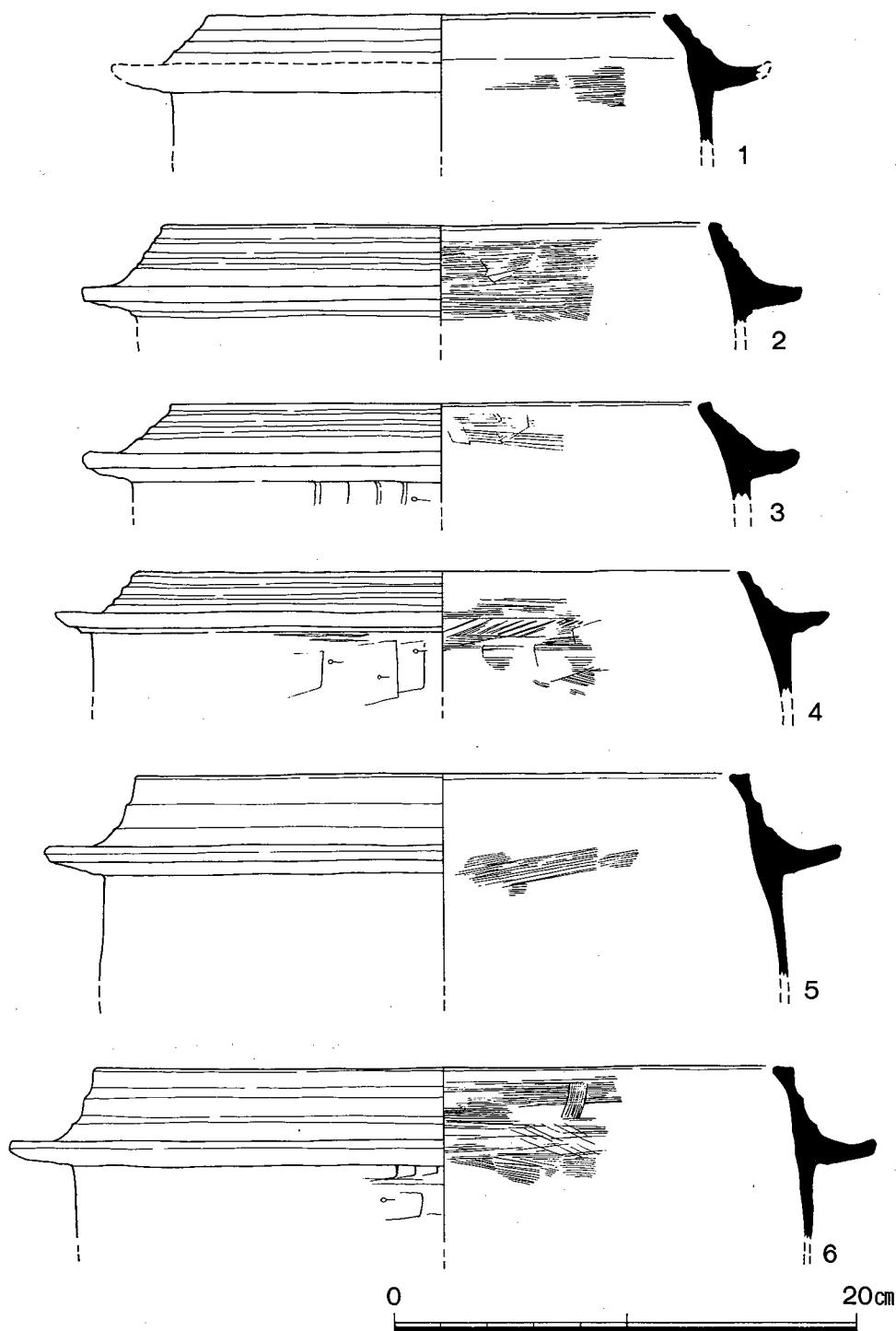


図11. SE-201 出土土器

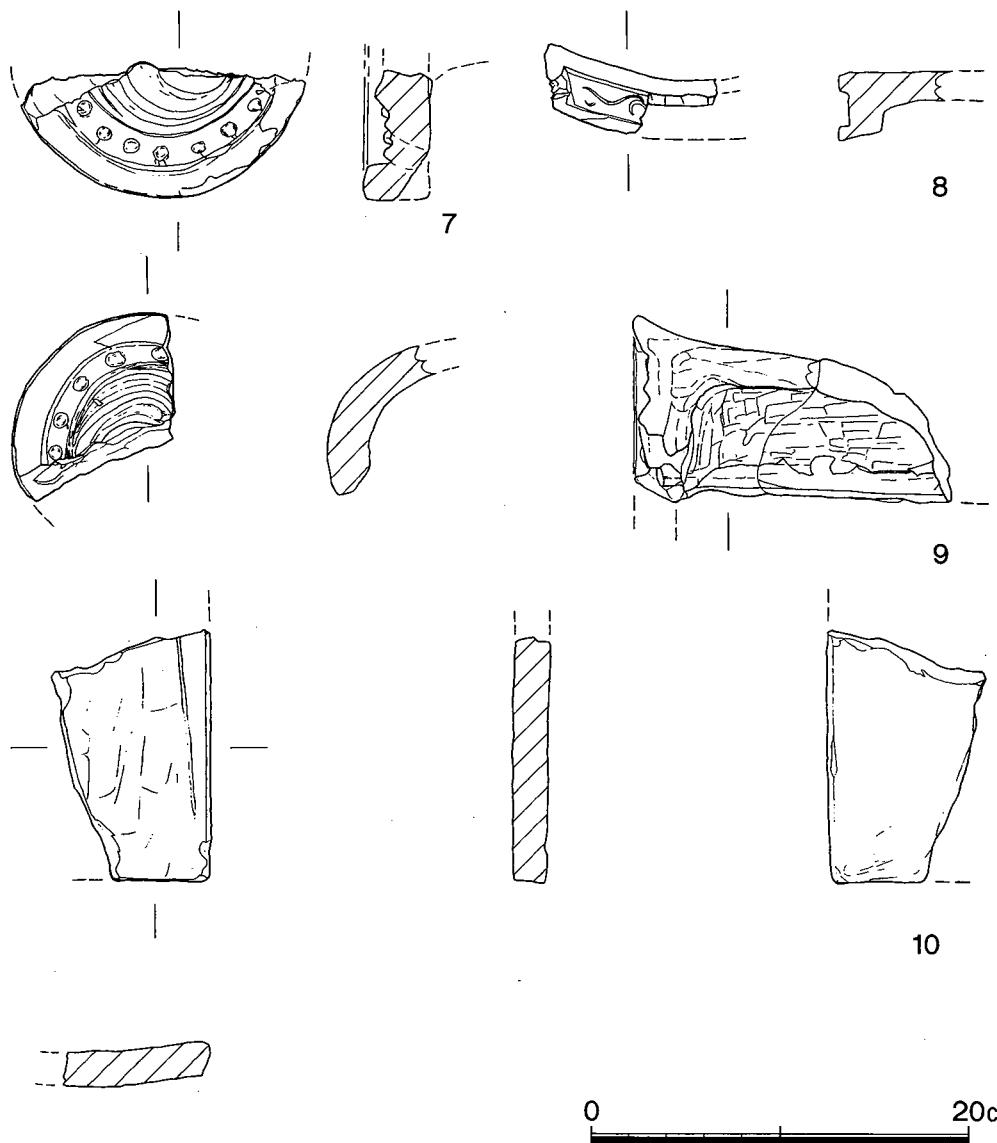


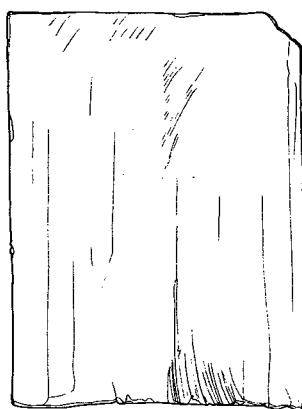
図12. SE-201 出土遺物

ナデで仕上げる。

6は復元口径28.6cmを測る。調整は内面にハケメ、外面鍔部下にケズリを施し、口縁部はナデで仕上げる。

7・9は軒丸瓦である。

7は瓦当部のみの破片である。巴文のまわりに珠文を有する。9は瓦当部から丸瓦部にかけての破片である。巴文のまわりに珠文を有する。珠文は7より少ないようである。丸



11



図13. SE-201 出土遺物

瓦部は内面にケズリ、外面に工具痕を有する。

8は軒平瓦である。瓦当部から顎部にかけての破片で唐草文を有する。

10・11は平瓦である。

10は厚さ 1.8cmを測る。凹凸面ともに工具痕が残る。11はSD-202出土片と接合できほぼ完形となった。長さ31cm、幅23cm、厚さ 2.2cmを測る。凹凸面ともに工具痕が残る。

#### SK-202

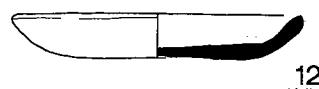
12は復元口径 7.6cmを測る土師器小皿である。口縁部はナデで仕上げる。

13は復元口径 9.8cmを測る瓦器枕である。高台のないもので外面に指オサエを施し、口縁部はナデで仕上げる。

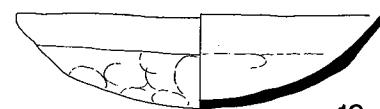
#### SD-202

14は口径 7.4cm、器高 1.2cmを測る土師器小皿である。完形で内外面をナデで仕上げる。

15は口径不明の陶器壺体部片である。内面は体部製作時の粘土接合痕がみられ、外面には凹線を有し釉薬を施す。



12



13



図14. SK-202 出土土器

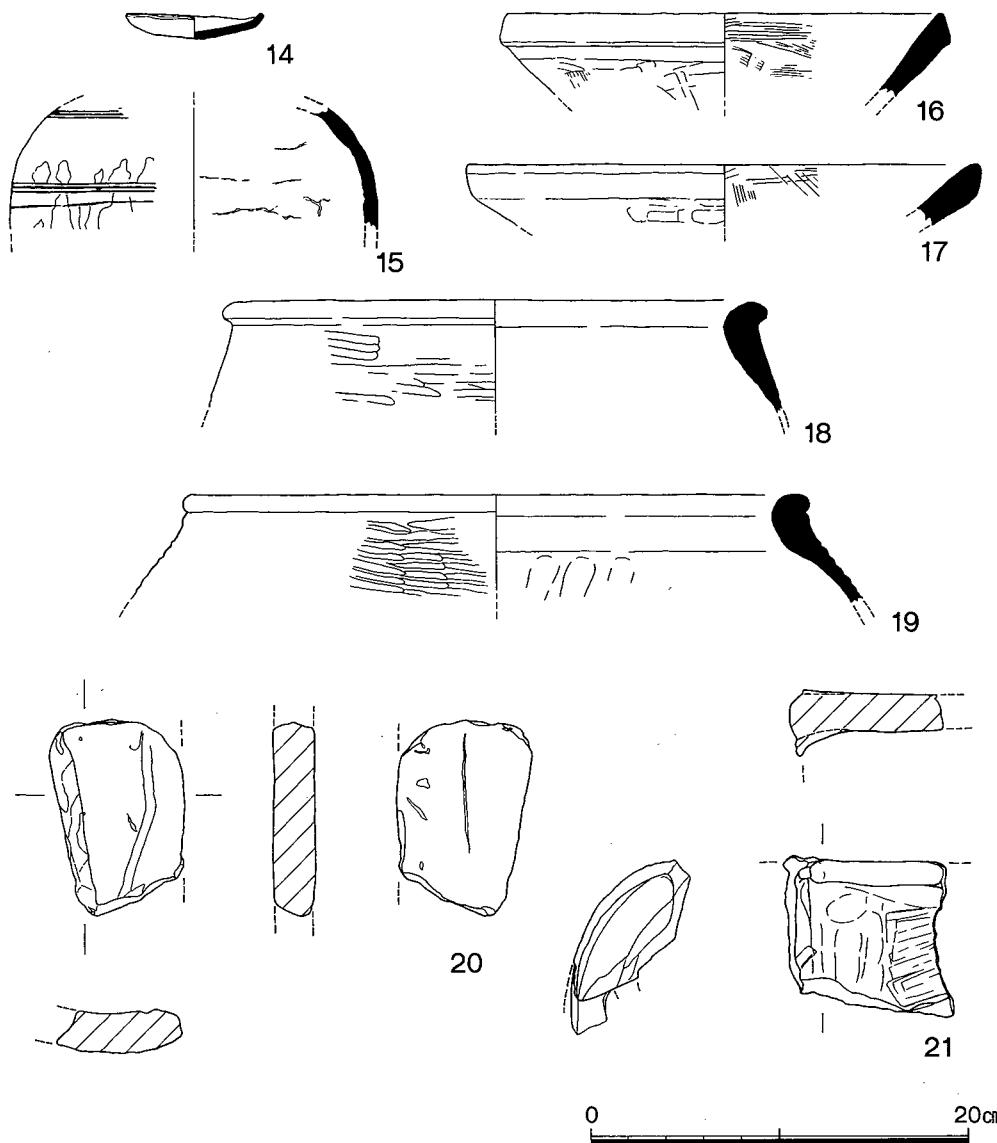


図15. SD—202 出土遺物

16・17は瓦質こね鉢である。

16は復元口径11.4cmを測る。内面にハケメ、外面口縁部下にケズリを施す。17は復元口径22.8cmを測る。口縁部の断面は三角形を呈し、内面にハケメ、外面口縁部下にケズリを施す。

18は復元口径26.6cmを測る瓦質甕口縁部片である。口縁部は玉縁を呈しナデで仕上げ、外面にタタキを施す。

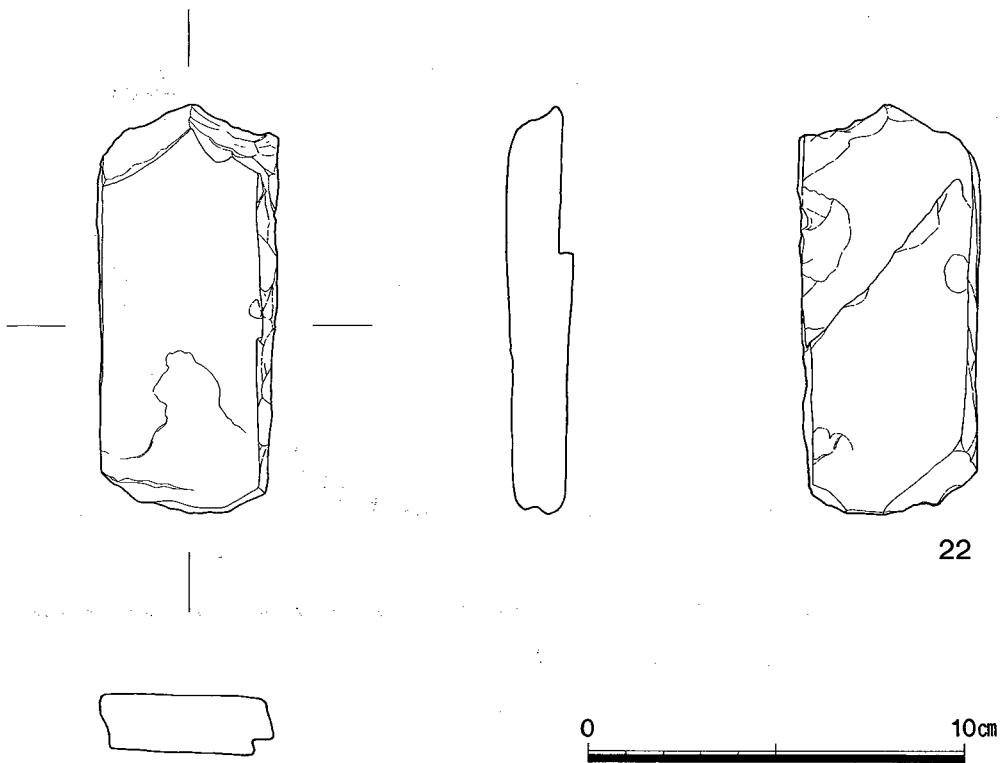


図16. SD-202 出土遺物

19は復元口径30.6cmを測る土師質口縁部片である。口縁部は玉縁を呈しナデで仕上げ、外面にタタキを施す。

20は平瓦片で厚さ 2.2cmを測る。凹凸面とともに工具痕が残る。

21は軒丸瓦片である。瓦当部が欠失しており、内外面に工具痕が残る。

22は長さ10.9cm、幅 4.8cm、厚さ 1.6cmを測る砥石である。両面ともに使用痕を有する。

### SD-203 (図17・18、図版12・13)

23は復元口径23.2cmを測る瓦質羽釜である。調整は内面にハケメ、外面鍔部下にケズリを施し、口縁部はナデで仕上げる。

24は復元口径31.2cmを測る土師質すり鉢口縁部片である。内面にハケメ、外面口縁部下にケズリを施す。

25は復元底部径10.5cmを測る瓦質すり鉢底部片である。内面にオロシメ、外面にケズリを施す。

26は瓦当部から丸瓦部にかけての破片である。巴文のまわりに珠文を有する。丸瓦部は凹凸面とともに工具痕が残る。

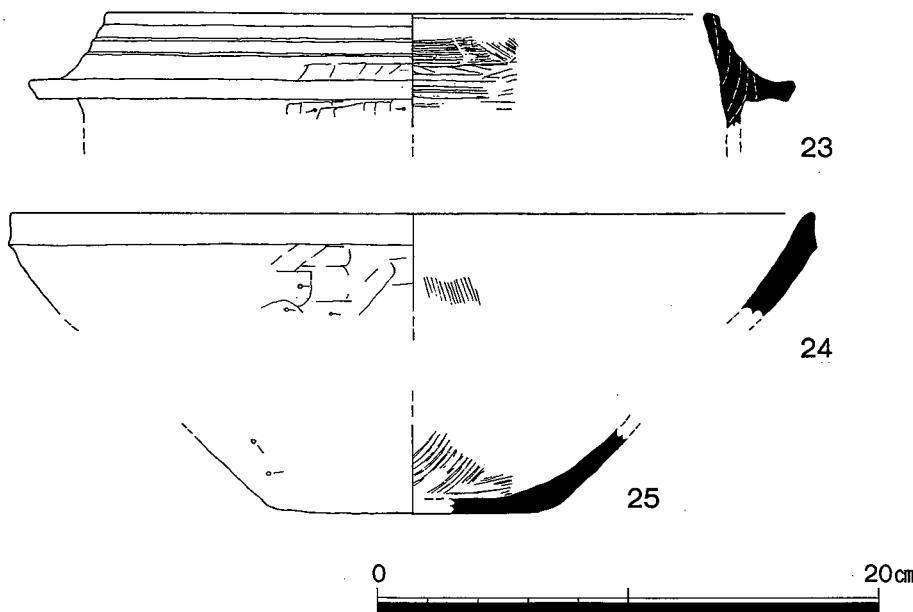


図17. SD-203 出土土器

27は丸瓦片である。凹凸面ともに工具痕が残る。

28は厚さ2cmを測る平瓦片である。凹凸面ともに工具痕が残る。

#### SX-202 (図19、図版12)

29は復元口径6.8cmを測る土師器小皿片である。内外面をナデで仕上げる。

30は復元口径13.2cmを測る瓦器椀口縁部片である。内面にミガキを施し、外面に指オサエを施す。

31・35は土師質甕である

31は口径不明で口縁部は玉縁状を呈し、外面にタタキを施す。35は復元口径30.8cmを測る。口縁部は玉縁状を呈し、外面にタタキを施す。

32は復元口径28cmを測る瓦質こね鉢口縁部片である。外面口縁部下にケズリを施す。

33・34は瓦質羽釜である。

33は復元口径23.4cmを測る。鍔部が欠失しているが、内面にハケメ、外面鍔部下にケズリを施し、口縁部はナデで仕上げる。34は復元口径22.2cmを測る。鍔部が欠失しているが、内面にハケメ、外面鍔部下にケズリを施し、口縁部はナデで仕上げる。

36・37は平瓦片である。

36は厚さ2.4cmを測る。凹凸面ともに工具痕が残る。37は厚さ1.8cmを測る。凹凸面ともに工具痕が残る。

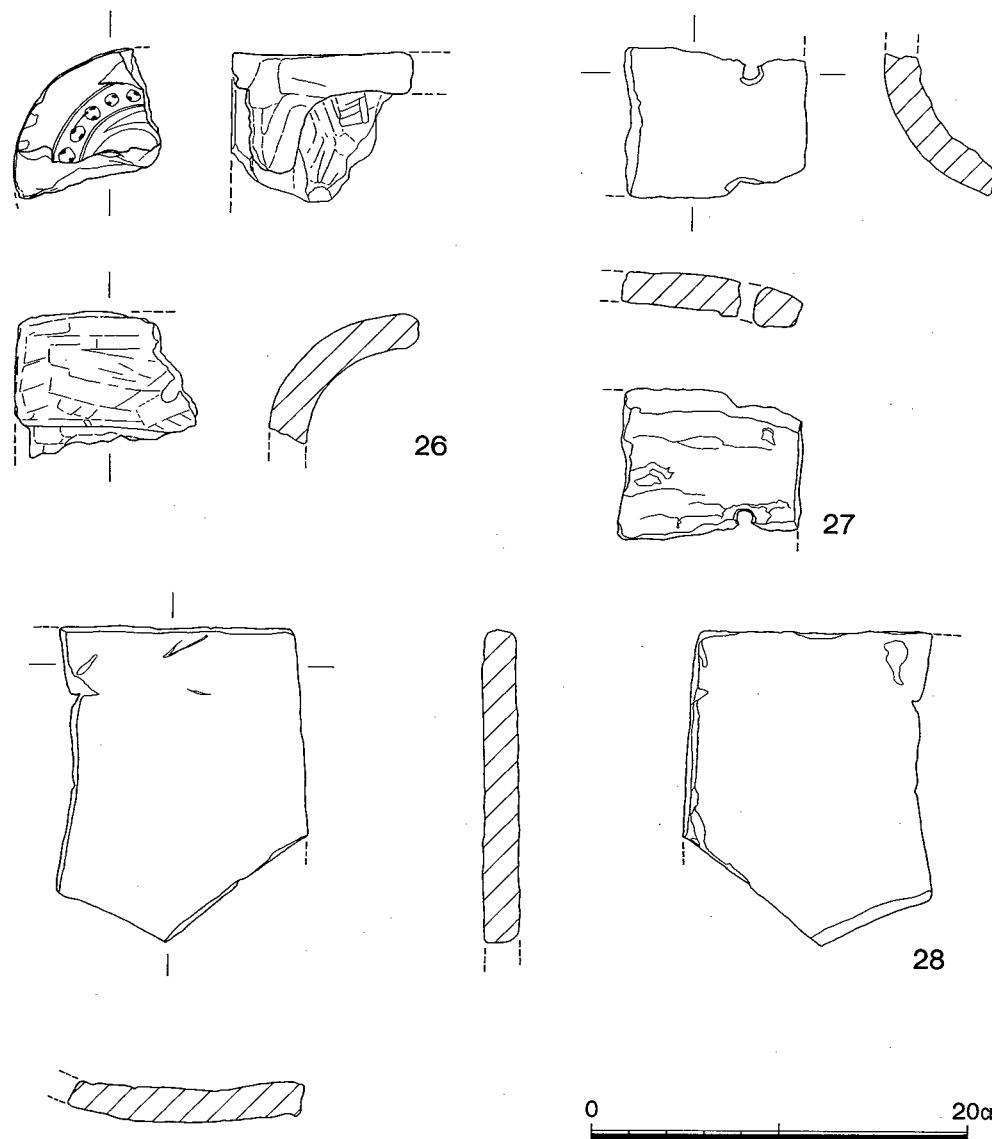


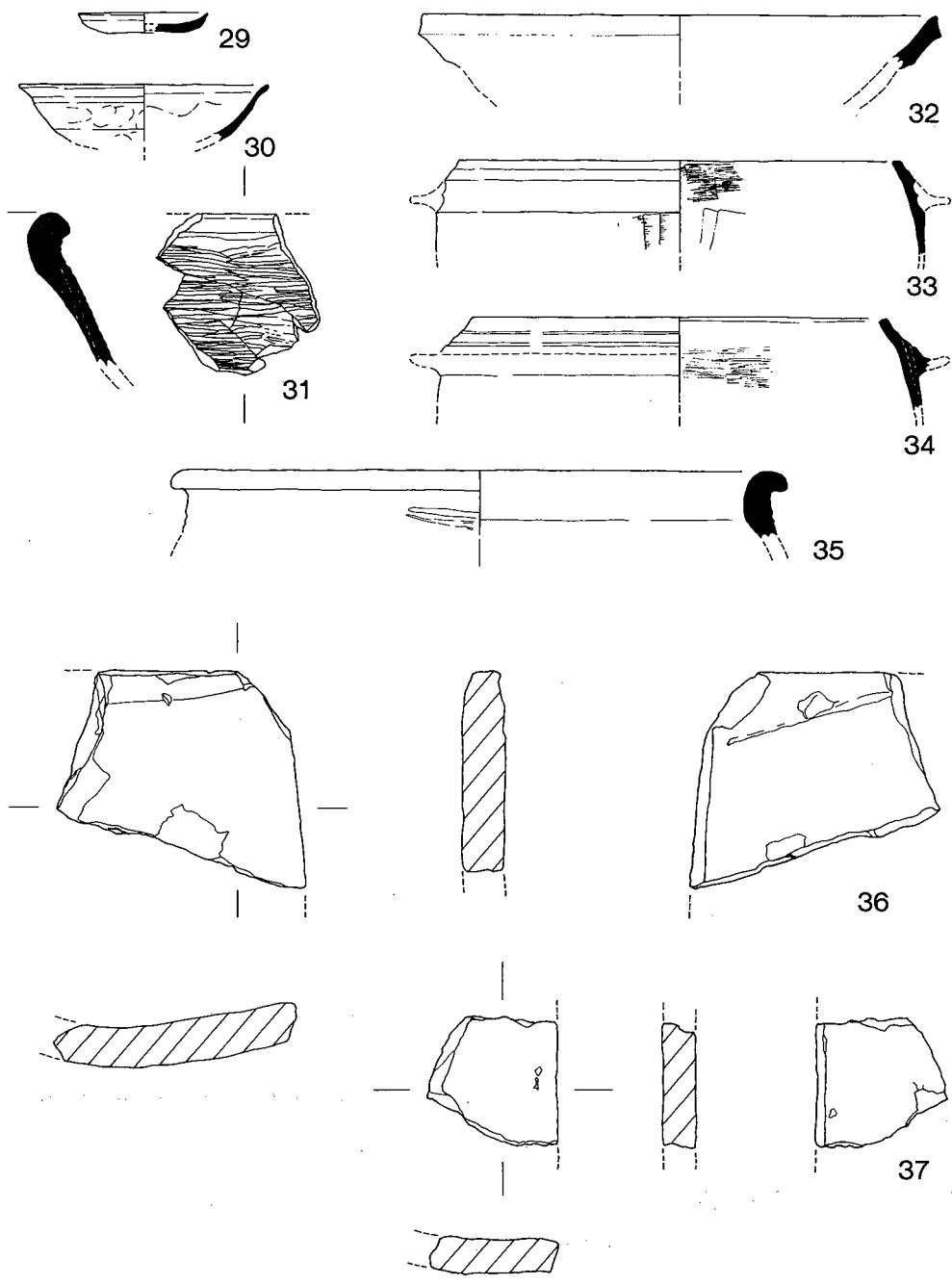
図18. SD-203 出土遺物

SD-201 (図20、図版12)

40は復元口径28.2cmを測る土師質こね鉢口縁部片である。調整は内面にハケメ、外面口縁部下にケズリを施し、口縁部はナデで仕上げる。

SX-209 (図20)

41は復元口径22cmを測る瓦質羽釜である。調整は内面にハケメ、外面鍔部下にケズリを施し、口縁部はナデで仕上げる。



0 20cm

図19. SX-202 出土遺物

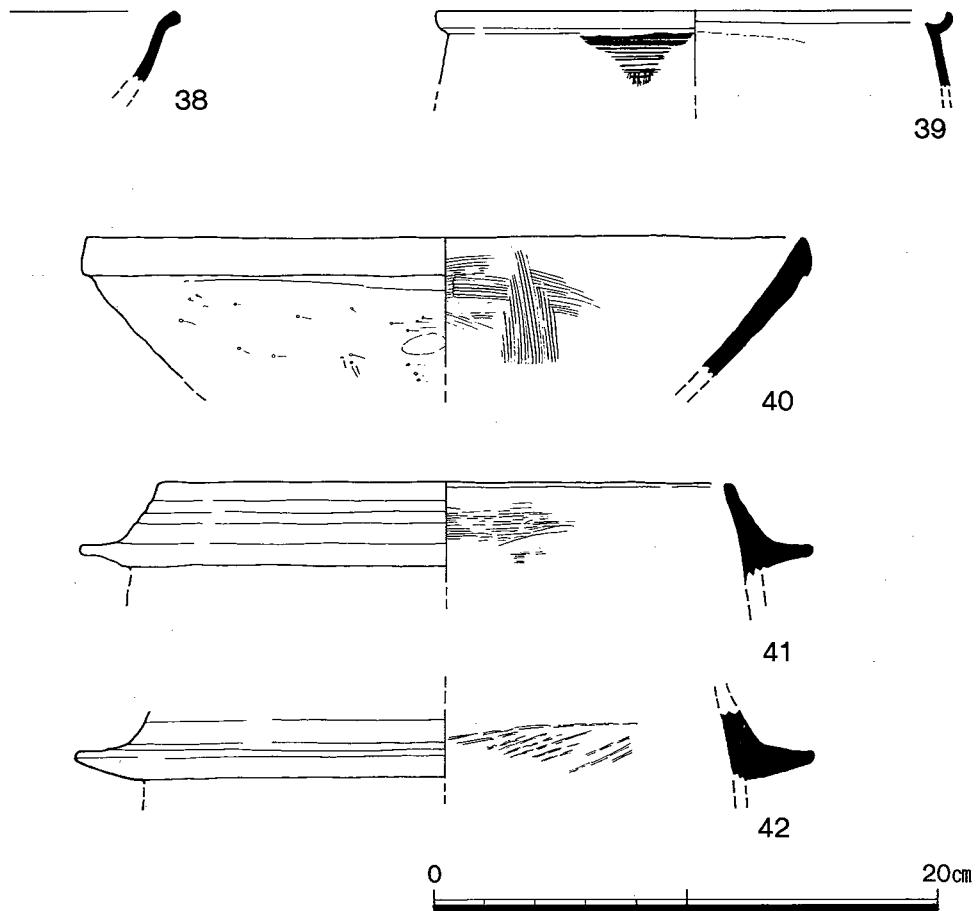


図20. SD—201(40)、SX—209(41)、SX—210(38)、包含層第2層(39、42)出土土器  
SX—210(図20)

38は口径不明の磁器口縁部片である。

#### 包含層第2層(図21、22)

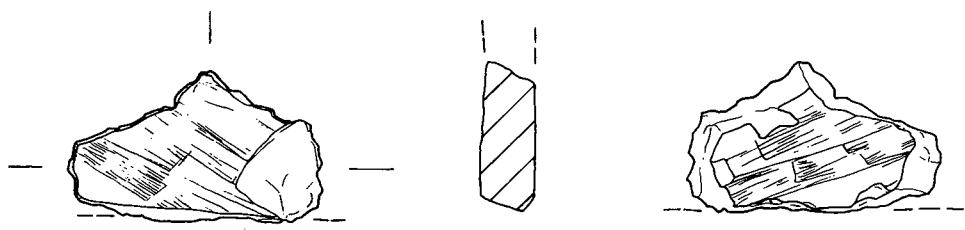
39は復元口径約20cmを測る陶器口縁部片である。内外面に釉薬を施す。

42は復元鍔部径28.4cmを測る土師質羽釜鍔部片である。口縁部、体部が欠失している。  
内面にハケメを施し、鍔部はナデで仕上げる。

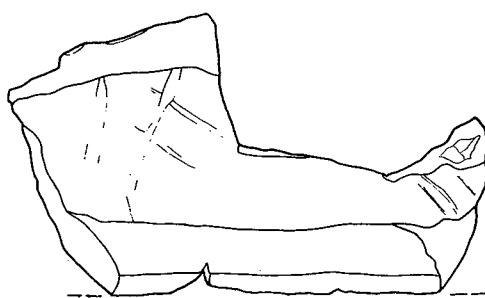
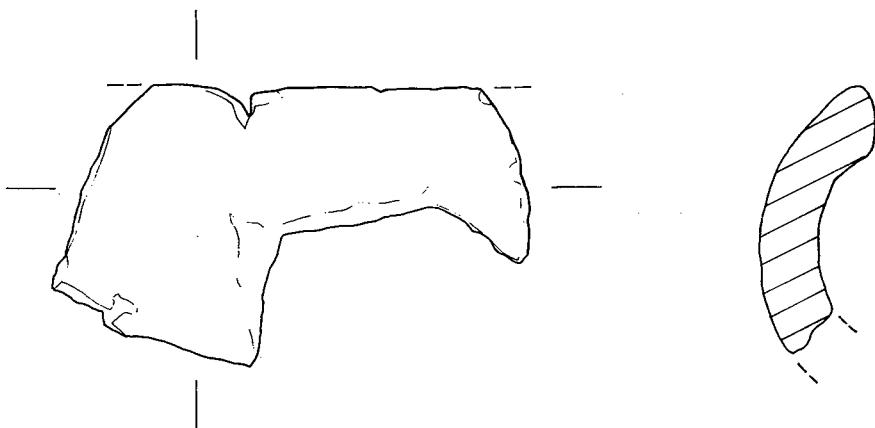
43・45～47は平瓦片である。

43は厚さ 2.2cmを測る。凹凸面ともに工具痕が残る。45は厚さ 1.8cmを測る。凹凸面ともに工具痕が残る。46は厚さ 2.4cmを測る。凹凸面ともに工具痕が残る。47は厚さ 1.8cmを測る。凹凸面ともに工具痕が残る。

44は丸瓦片である。内外面ともに工具痕が残る。



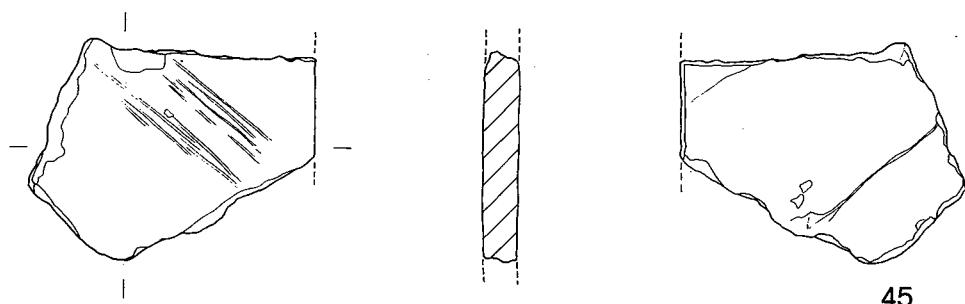
43



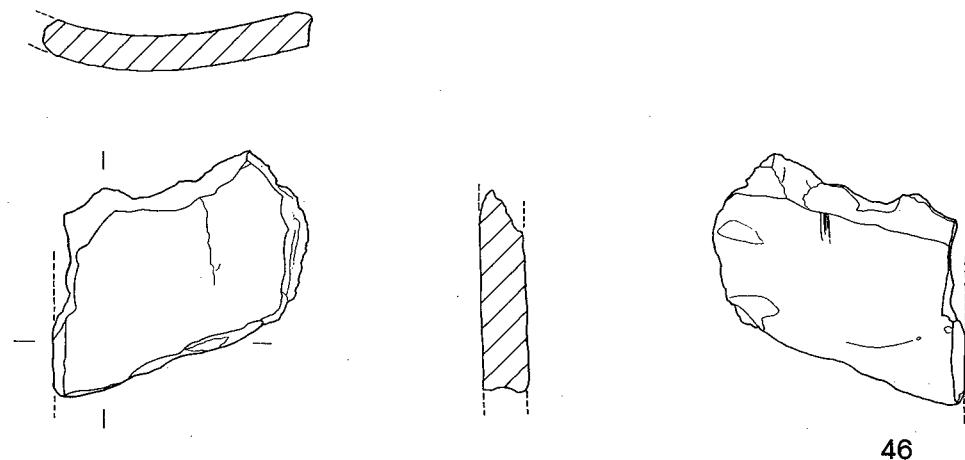
44



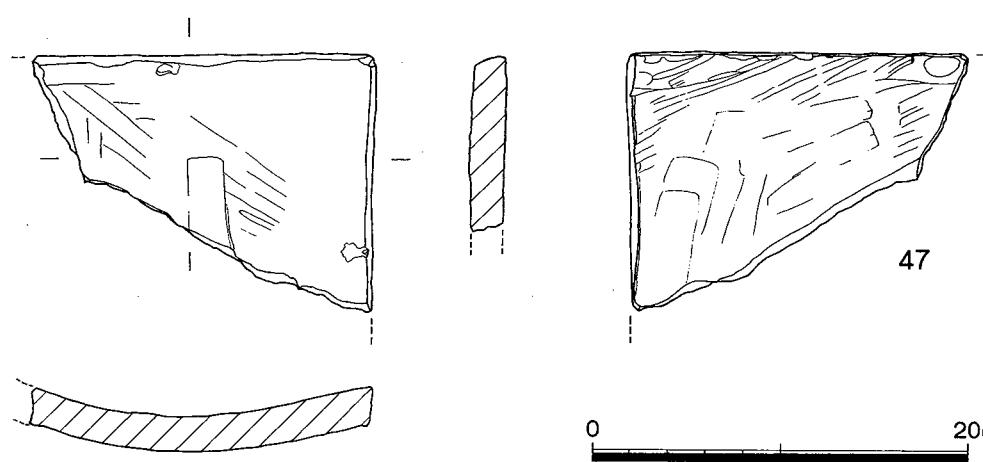
図21. 包含層第2層出土遺物



45



46



47

0 20cm

図22. 包含層第2層出土遺物

### 青磁 (図23、図版13)

48～50は青磁である本遺跡出土のものはこの3点のみである。

48は復元口径13.6cmを測る口縁部片である。包含層第2層から出土しており外面に雷文を施す。

49は復元高台径6cmを測る底部片である。高台はまっすぐ伸び端部は丸い。SD-203から出土している。

50は復元高台径6.4cmを測る底部片である。高台はまっすぐ伸び端部は丸い。SE-201から出土している。

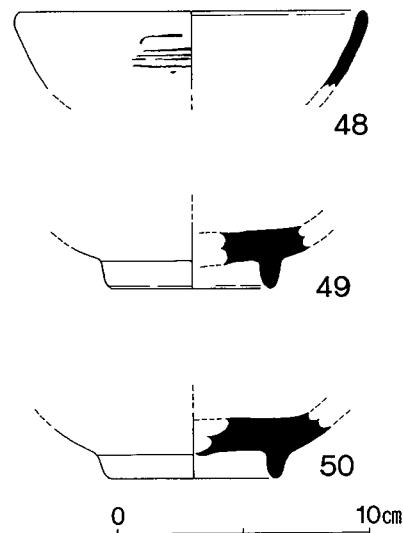


図23. 青 磁

### SE-201 出土木製品 (図24～28)

51は底板と思われる。現存長10cm、厚さ0.6cmを測る。両面に加工痕が認められ、断面部に接合のための木クギ穴が2カ所認められる。

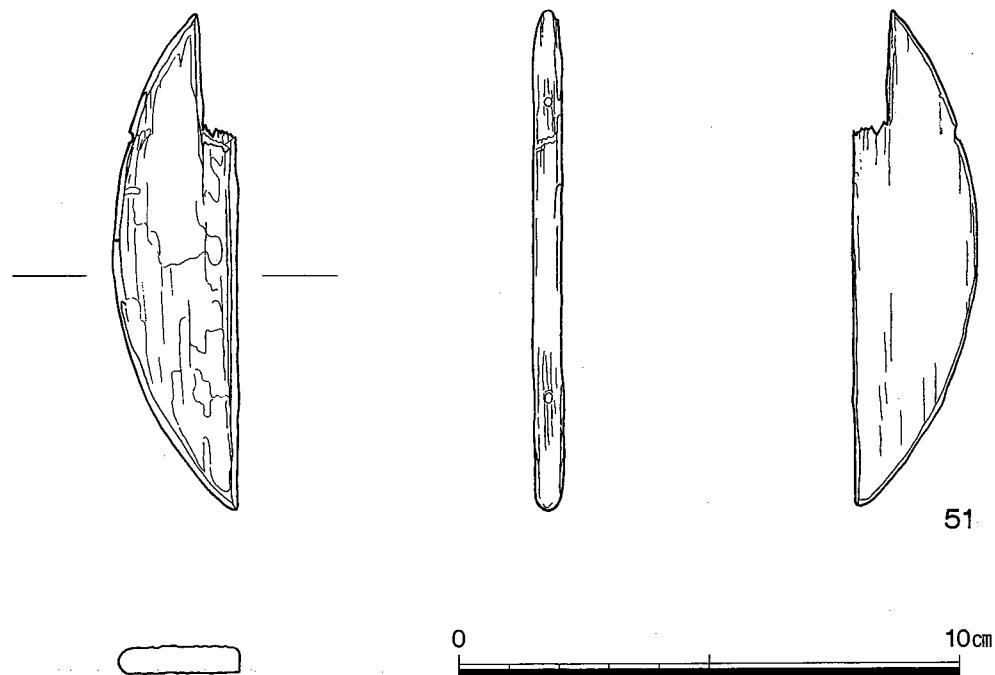


図24. SE-201 出土木製品

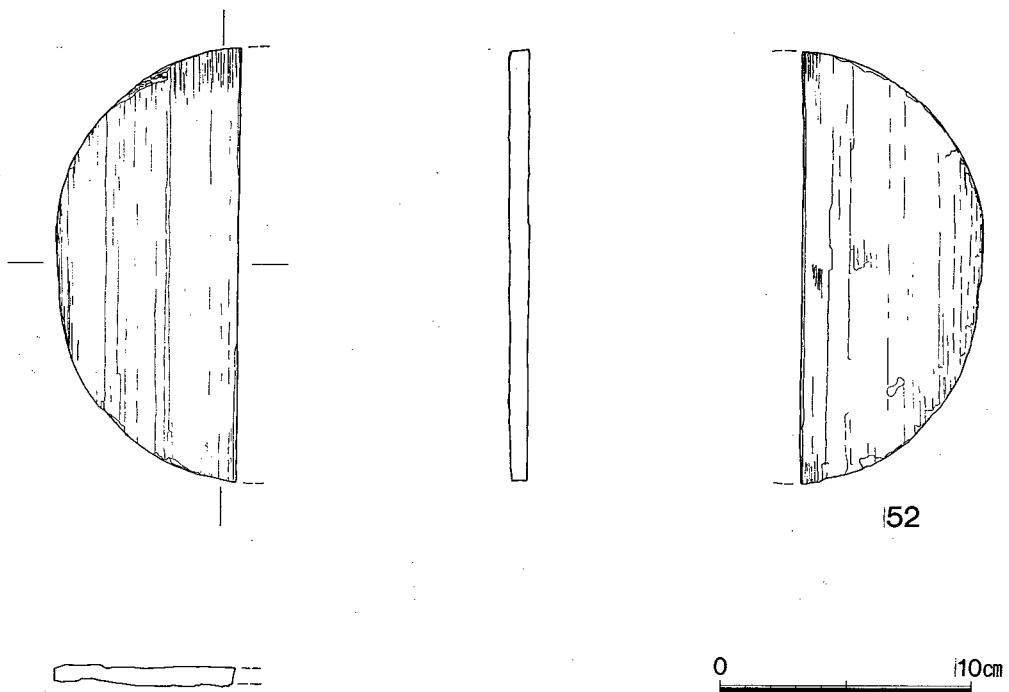


図25. SE-201 出土木製品

52は底板と思われる。現存長17cm、厚さ 0.8cmを測る。両面に加工痕が認められる。

53は高台径不明の漆塗り椀である。破片のため詳しい形状については不明であるが内面に朱漆が認められる。

54は高台径 8 cmを測る漆塗り椀である。破片のため詳しい形状については不明であるが内外面に漆が認められる。

55～59・61は側板と思われる。

55は現存長11.5cm、幅 3.7cm、厚さ 0.7cmを測る。両面に加工痕が認められる。56は現存長11.9cm、幅 4.2cm、厚さ 0.9cmを測る。両面に加工痕が認められる。57は長さ13.5cm、幅 4.5cm、厚さ 0.7cmを測る。両面に加工痕が認められる。58は長さ12.3cm、幅11.1cm、厚さ 0.7cmを測る。両面に加工痕が認められる。59は長さ13.6cm、幅 9.9cm、厚さ 0.7cmを測る。両面に加工痕が認められる。61は現存長13.8cm、幅14cm、厚さ 0.7cmを測る。両面に加工痕が認められる。

60は底板と思われる。現存長14cm、幅10.3cm、厚さ 0.7cmを測る。平面図に木クギ穴を有し、両面に加工痕が認められる。

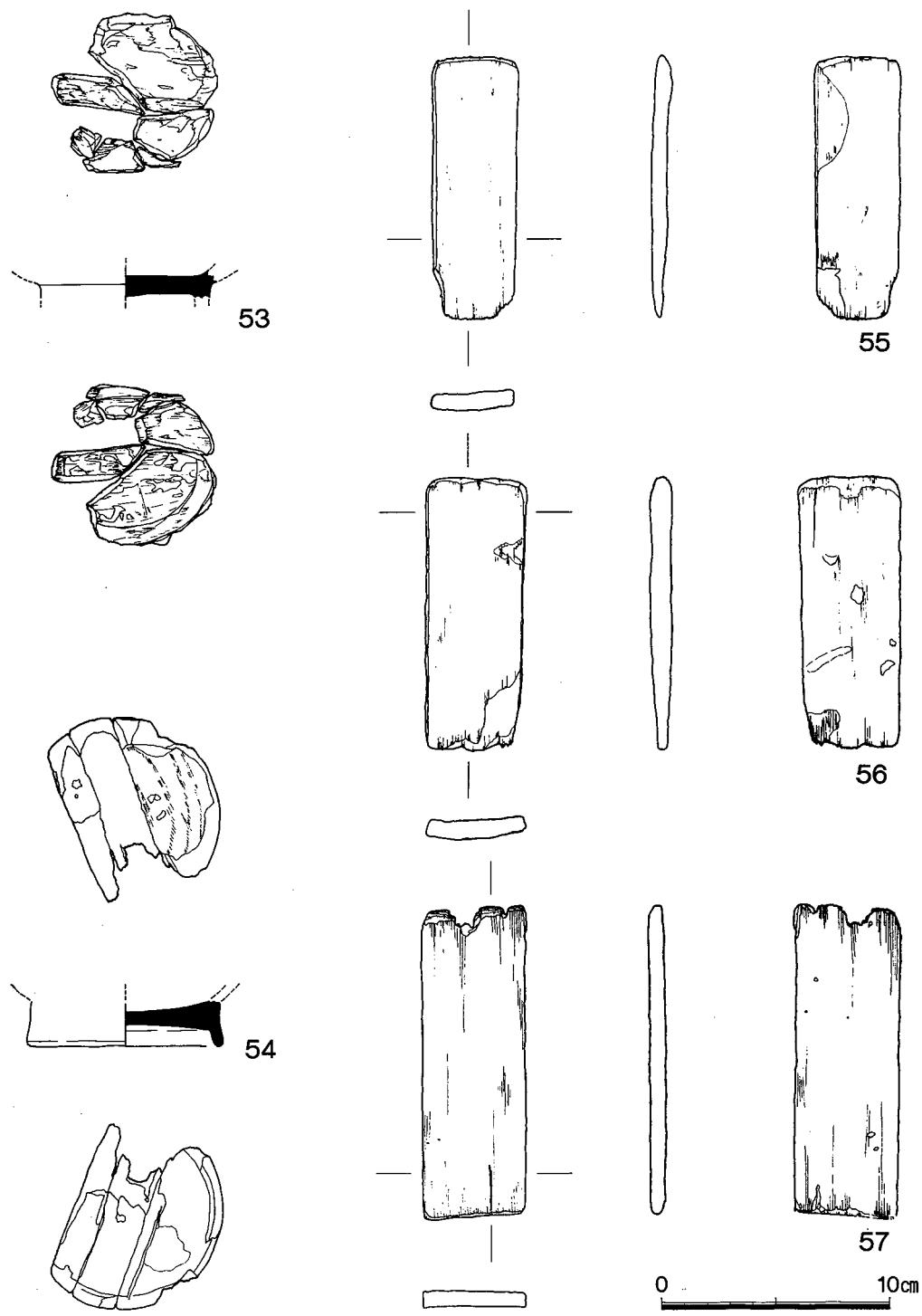
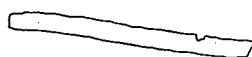
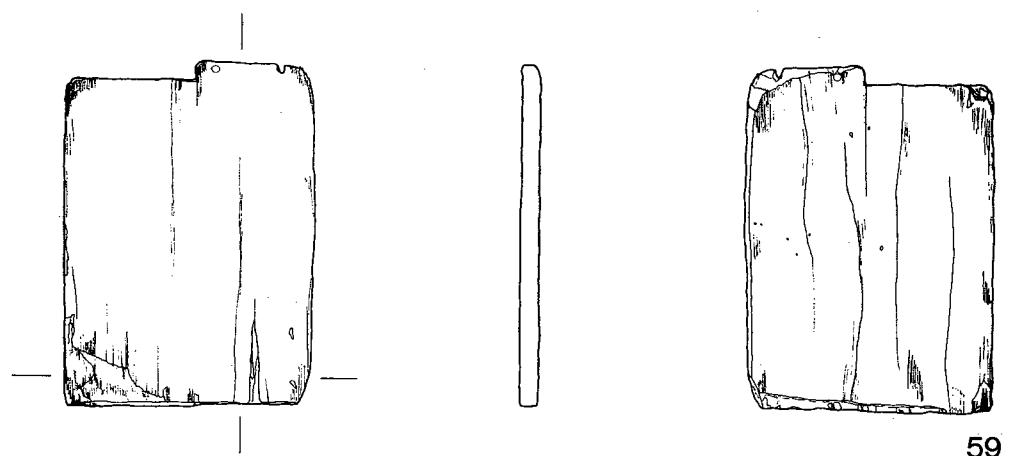
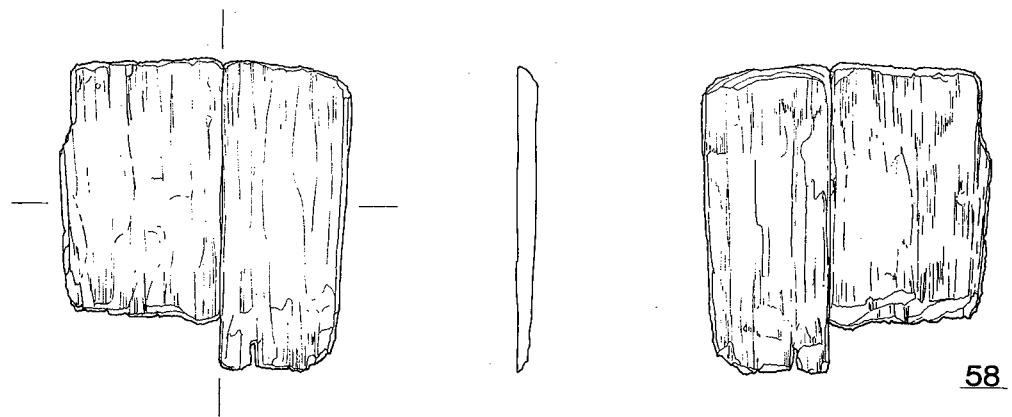
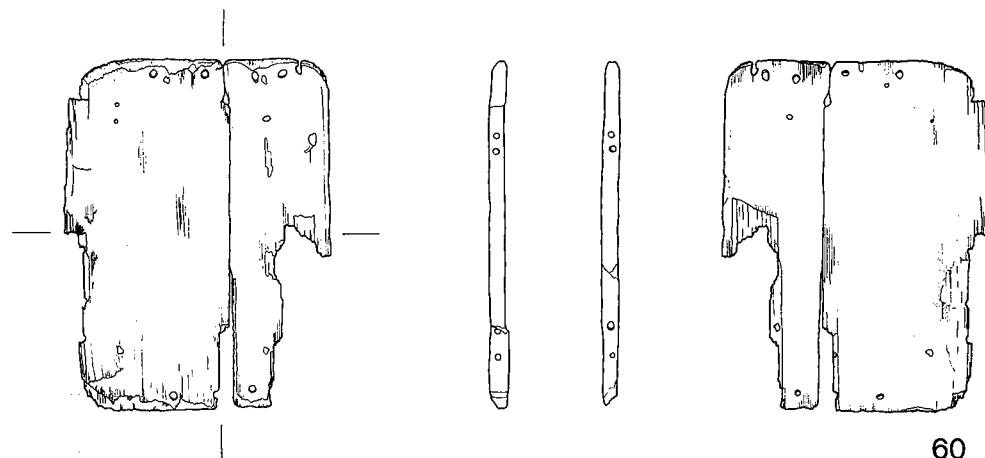


図26. SE—201 出土木製品

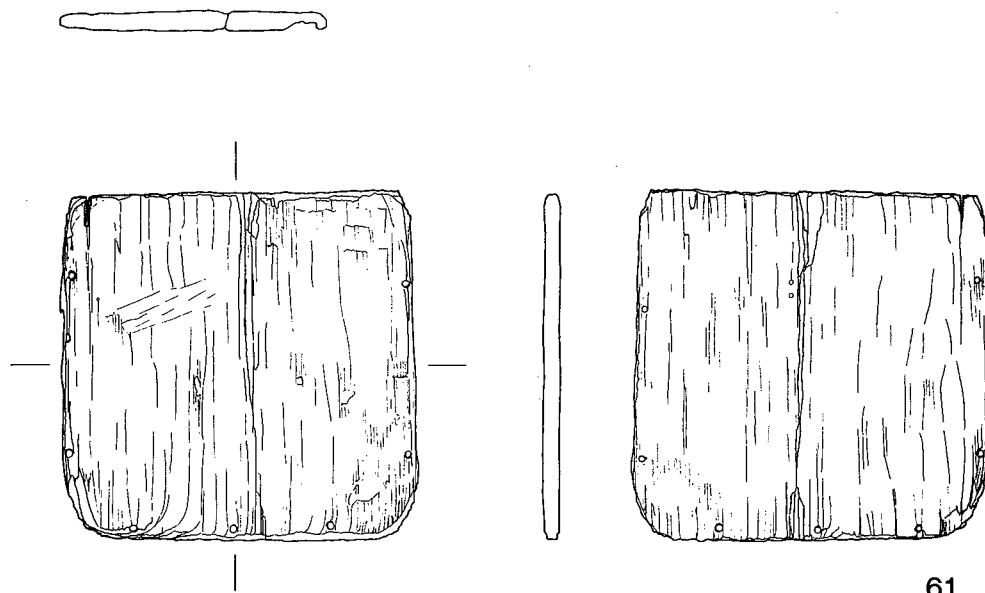


0 10cm

図27. SE-201 出土木製品



60



61



図28. SE-201 出土木製品

## 第4章 まとめ

今回の調査では、今まで解明されていなかった木積観音寺跡と関係の深い遺構を検出したことは大きな成果であると言える。

以下、その成果についてまとめる。

遺構の時期は第1遺構面が近世、第2遺構面が中世と考えられる。

中世の遺構は残りが良好であり西側に段を有しており段下の部分ではSE-201周辺をのぞいて遺構はあまり多いとは言えない。面積が限られているということで段下部分は包含層が5cm以下と薄く整地のための削平を行っている可能性が高いと考えられる。それに対して段上では包含層が5～20cmと良好で調査区北部が削平を受けているものの残りが良好である。

溝は3条検出している。SD-202はやや西側に方向がずれるものの南北方向に走る溝で南側の近木川方向に流れる。また、SD-201はSD-202にほぼ直交する溝で東西方向に走る溝のSD-202に切られる。この2条の溝は地形による制約を受けているものではなく区画に関係した溝の可能性が高いと言える。また、SD-201は幅広く浅い形状から雨落ち溝の可能性も考えられ、建物に関係した溝である可能性が高いと言える。

調査地は南側に近木川、東側に小川が流れしており両方向が切りたった崖になっており寺域の端部分と考えられる場所である。

この2条の溝に対してSD-203は西南一東北方向に走る溝であり方向が異なっており地形に制約を受けていたと考えられ、流れの方向も異なっている。

これら3条の溝は出土遺物や切り合い関係からSD-201が古いとみられるが時期的には14～15世紀のものと考えることができあまり時期差をもたないものと考えられる。

調査区南側に位置する遺構の中にはPit-201やPit-202のように焼土を含むものが見られるが、少量の分布のため詳しい状況を推測できない。しかし、火災によって焼失したということも言われており注意する必要がある。

### SE-201

本井戸は、遺構検出面より約1.2mのところまで井戸の側石と土で埋めている。埋めるために投げ入れた石は1m以上の厚さで堆積しておりその状況から地面上にも側石を積み

上げていたことがわかる。また、埋め戻し土出土の瓦とSD-202の瓦に接合関係が認められ、SD-202を削平した土を埋め戻しに使用した可能性も考えられる。井戸埋土からの出土遺物は瓦質羽釜が多くその時期は14~15世紀のもので、また曲げものの底や箱状の容器と考えられる側板部分などの木製品の外に漆椀、桃の種や木の皮、竹の根といったものも出土しており、当時の周辺状況を知るうえで興味深い。

また、側石及び埋め戻しの石の長さ、幅、厚さについて113点について計測、平均をとった結果長さ約37cm、幅約23cm、厚さ13cmの丸石で南側の近木川のものを使用したと考えられる。

第2遺構面において遺構から出土した遺物の時期は、14~15世紀であり一時期に使用された場所であったことがわかる。平安時代に創建と伝えられる木積観音寺跡であるが、現在のこる仏像群（平安時代）、釤無堂（鎌倉時代）のほかに石造物もあり、特に孝恩寺境内の五輪塔は貞和4年（1348年）の銘をもつもので時期的に本調査地の遺構の時期と重なってくる。

本調査地の結果から考えると14世紀ごろから木積観音寺はその寺域を拡大し、今まで寺域でなかった場所についても開発を加えていたと考えられ、充実した時期にあったと考えることができるのではないだろうか。

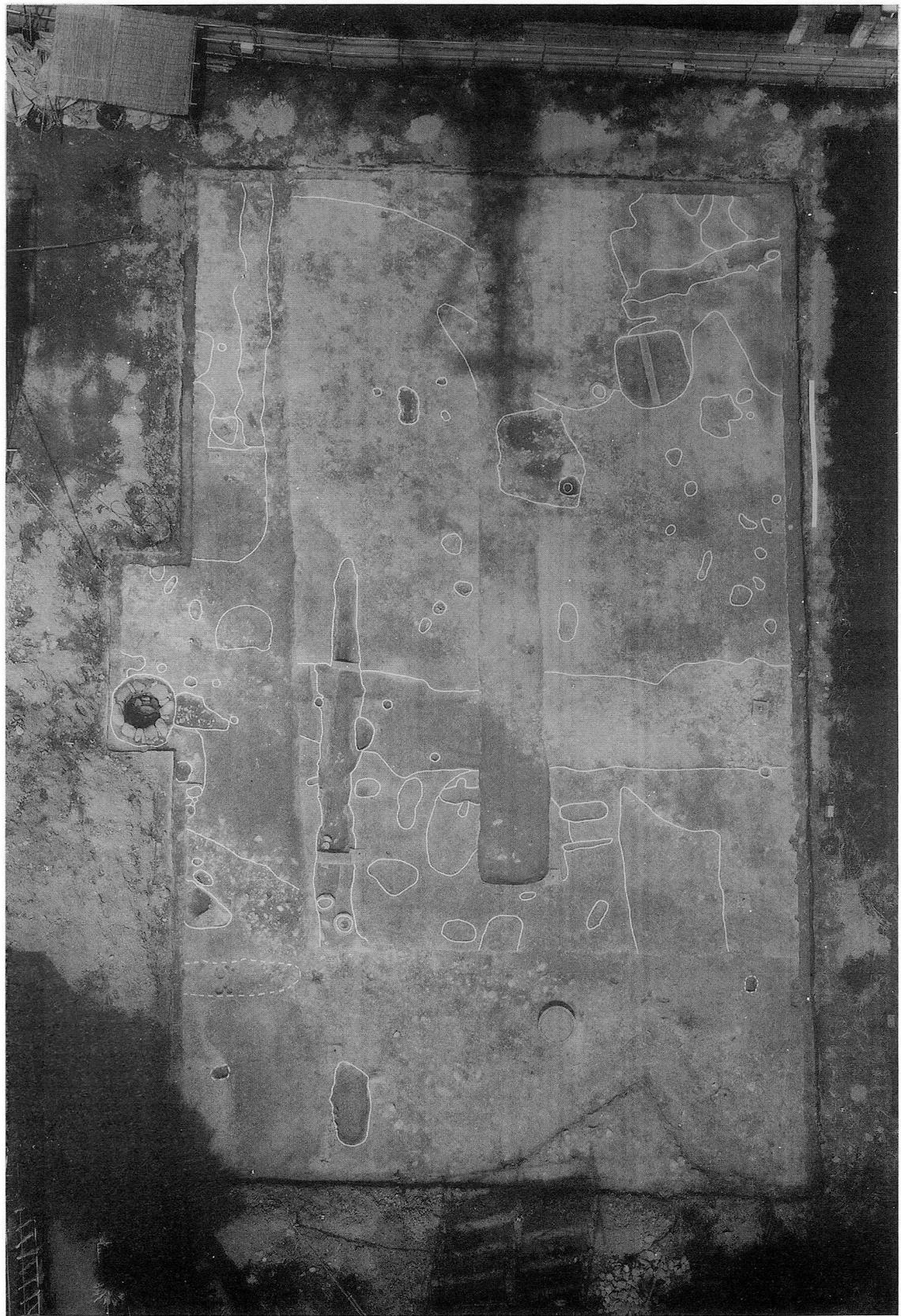
本調査地では柱穴を確認しているが建物跡を検出していない。しかし、建物があった可能性は高いと言える。また、出土瓦の量が比較的少なく建物が瓦葺きのものでなかった可能性も考えられる。

今回の調査では一部ではあるが木積観音寺の関係と考えられる遺構を検出することができた。木積観音寺跡の調査ははじまったばかりでありこれから周辺部の開発については特に注意して対処して行くことが必要であるとともに今後の調査成果に大きく期待する。

図

版

図版 1 検出遺構



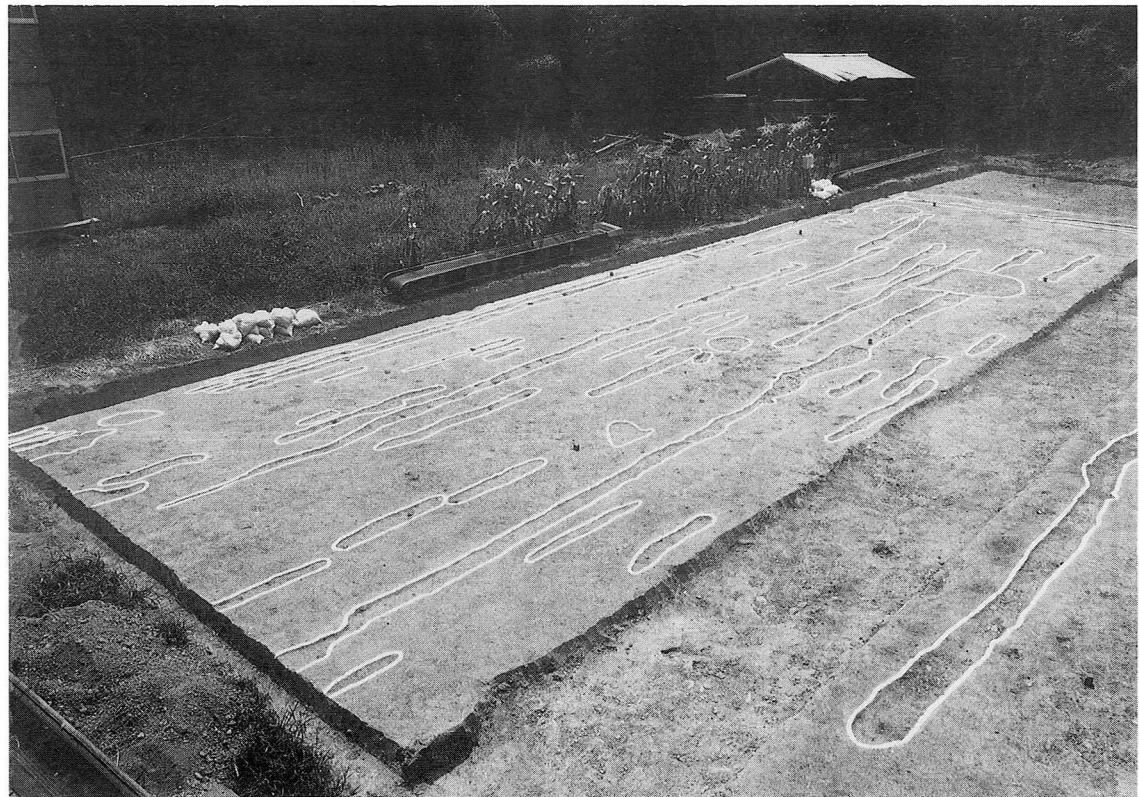
調査区全景

図版2 検出遺構



1. 第1遺構面

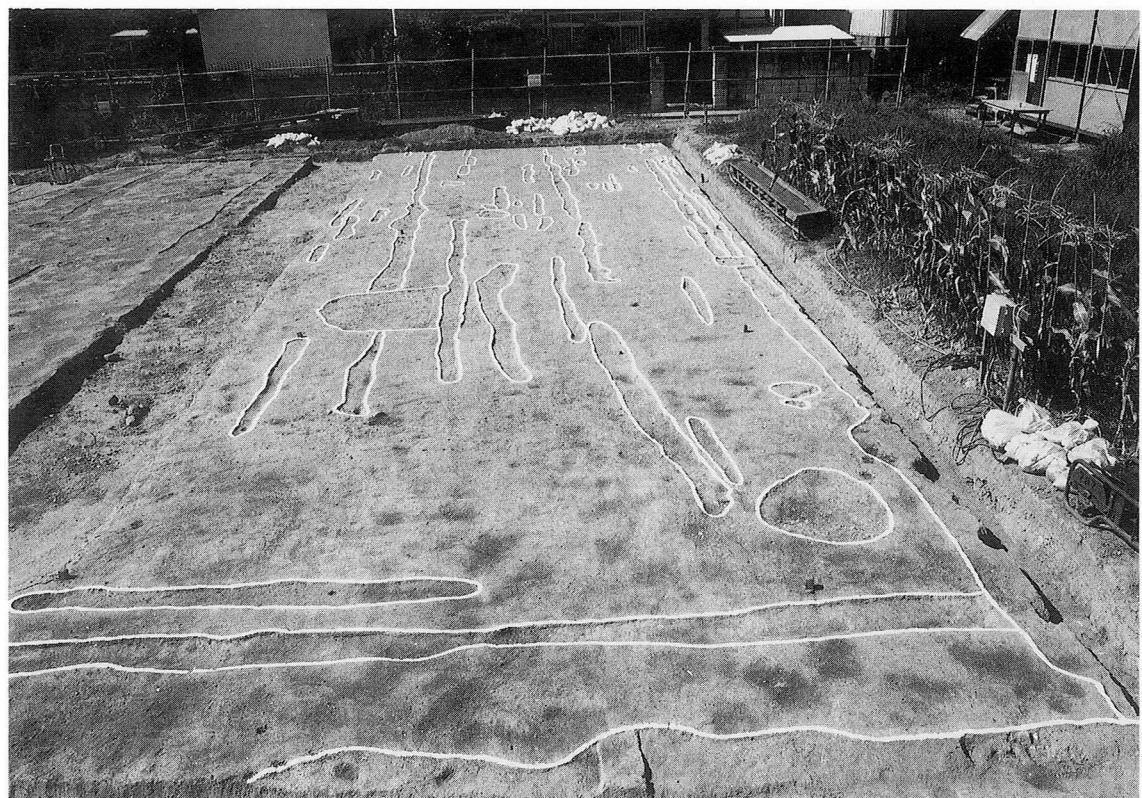
北東より



2. 同 上

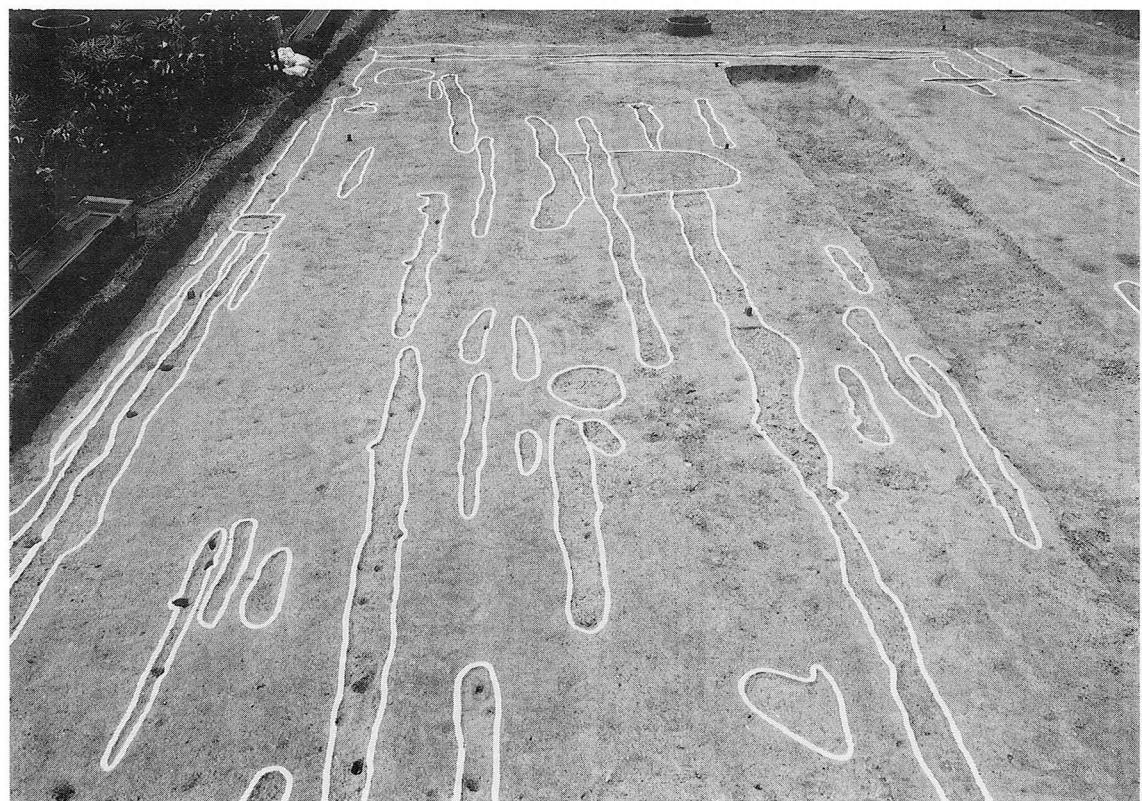
北西より

図版3 検出遺構



1. 第1遺構面 東部

南より



2. 同 上

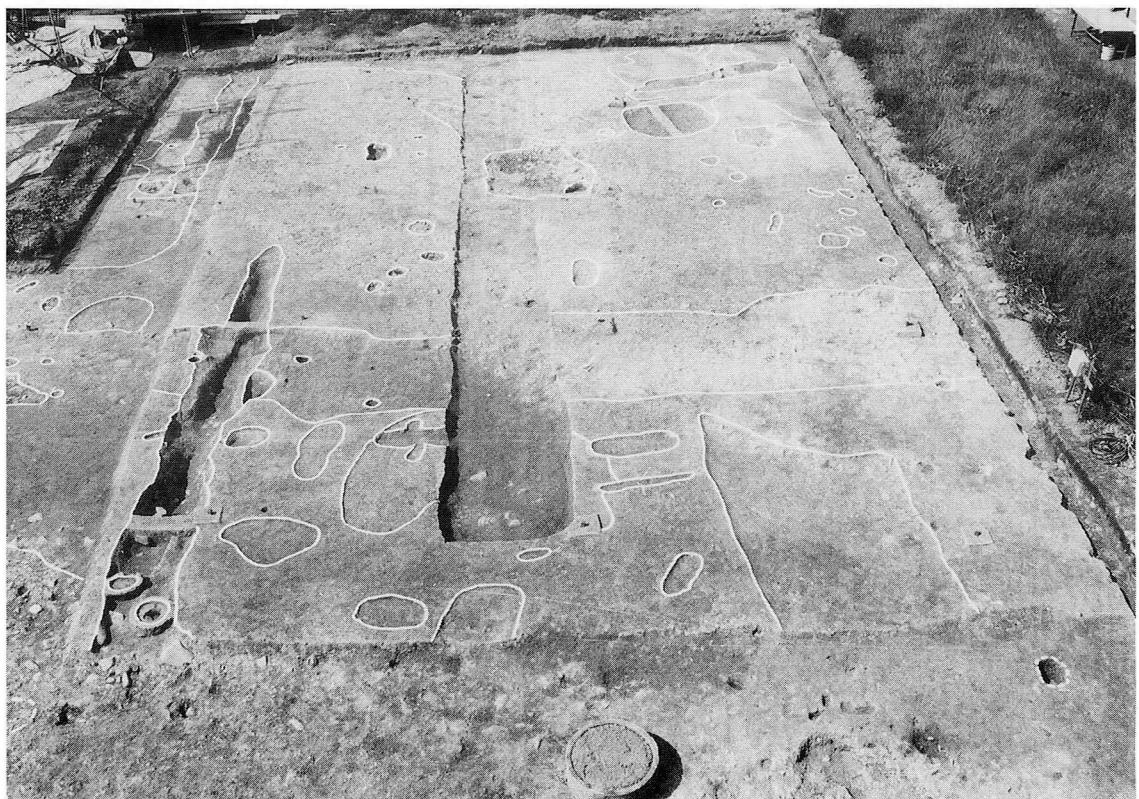
北より

図版4 検出遺構



1. 第2遺構面 全景

南より



2. 同 上 段上部

南より

図版5 検出遺構



1. SE-201

北西より



2. 同上

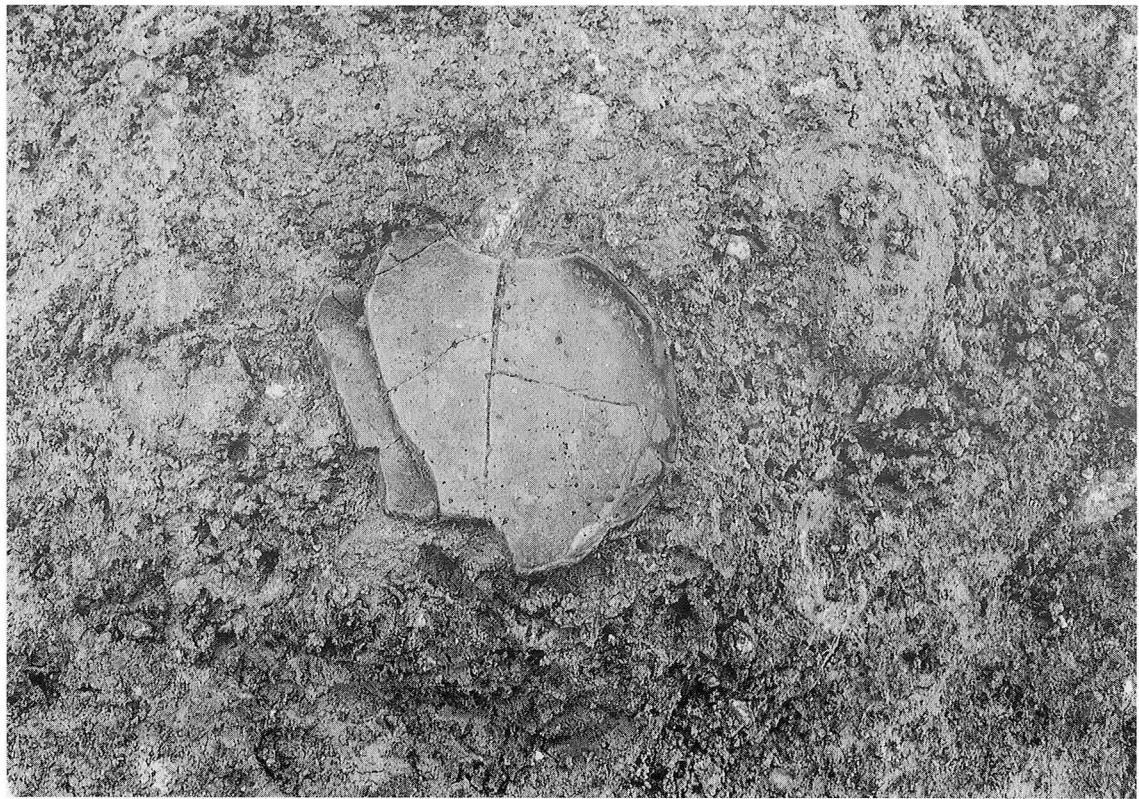
東より

図版 6 検出遺構

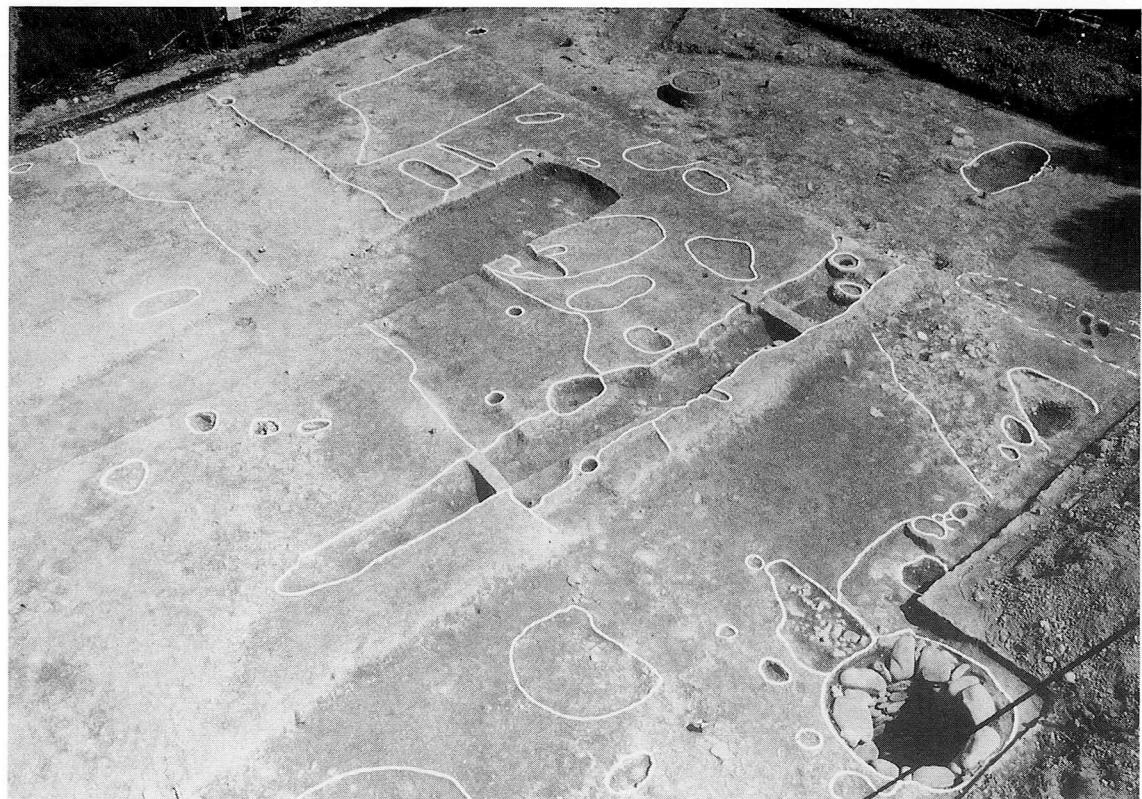


1. SK-202

南より

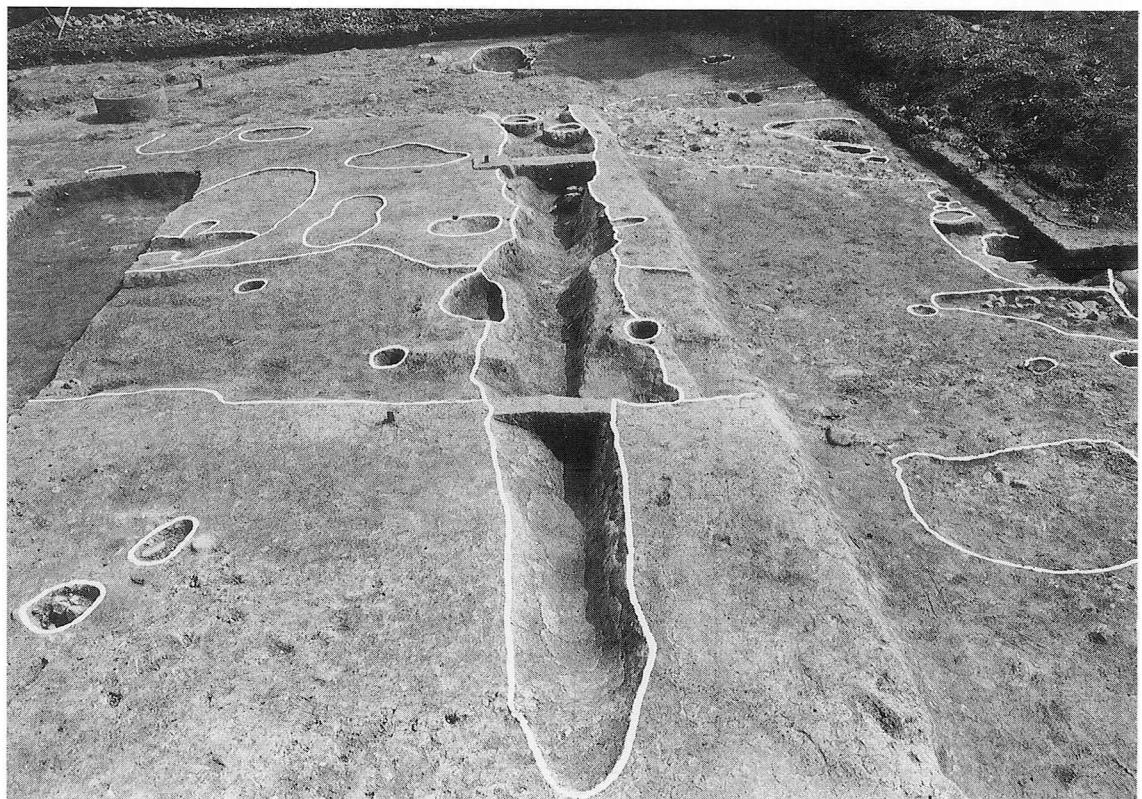


2. 同 上



1. SD-202

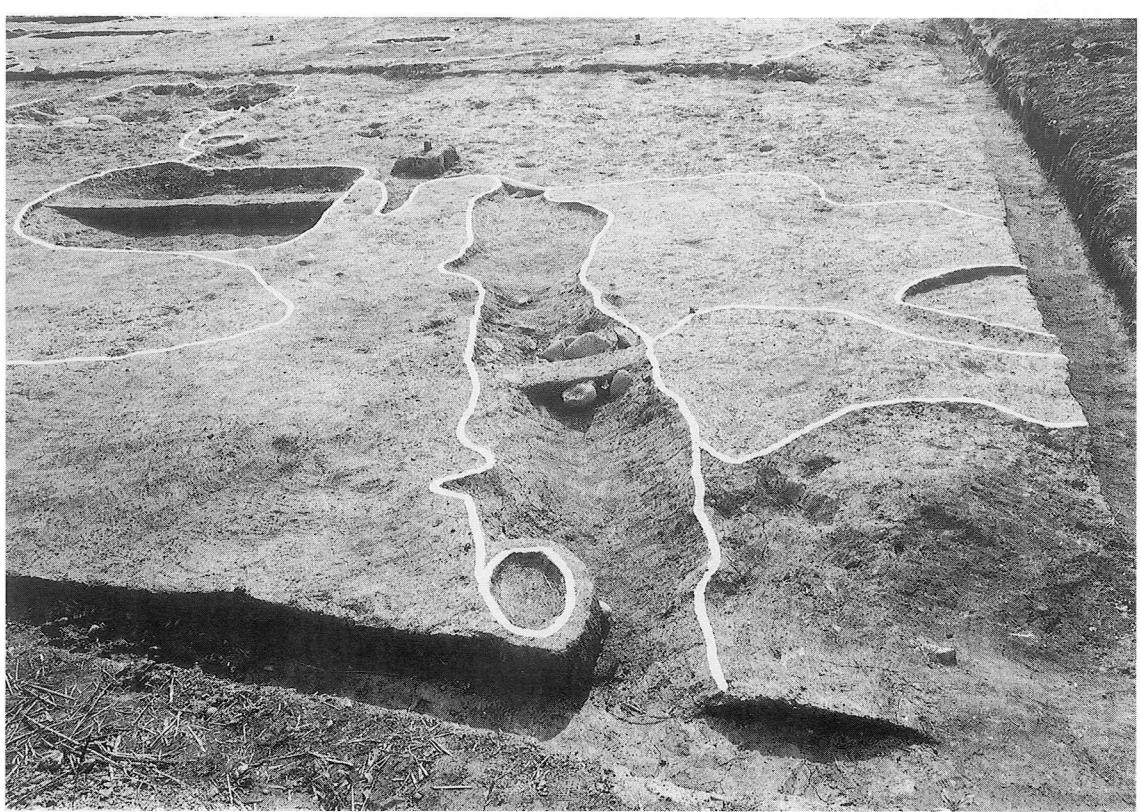
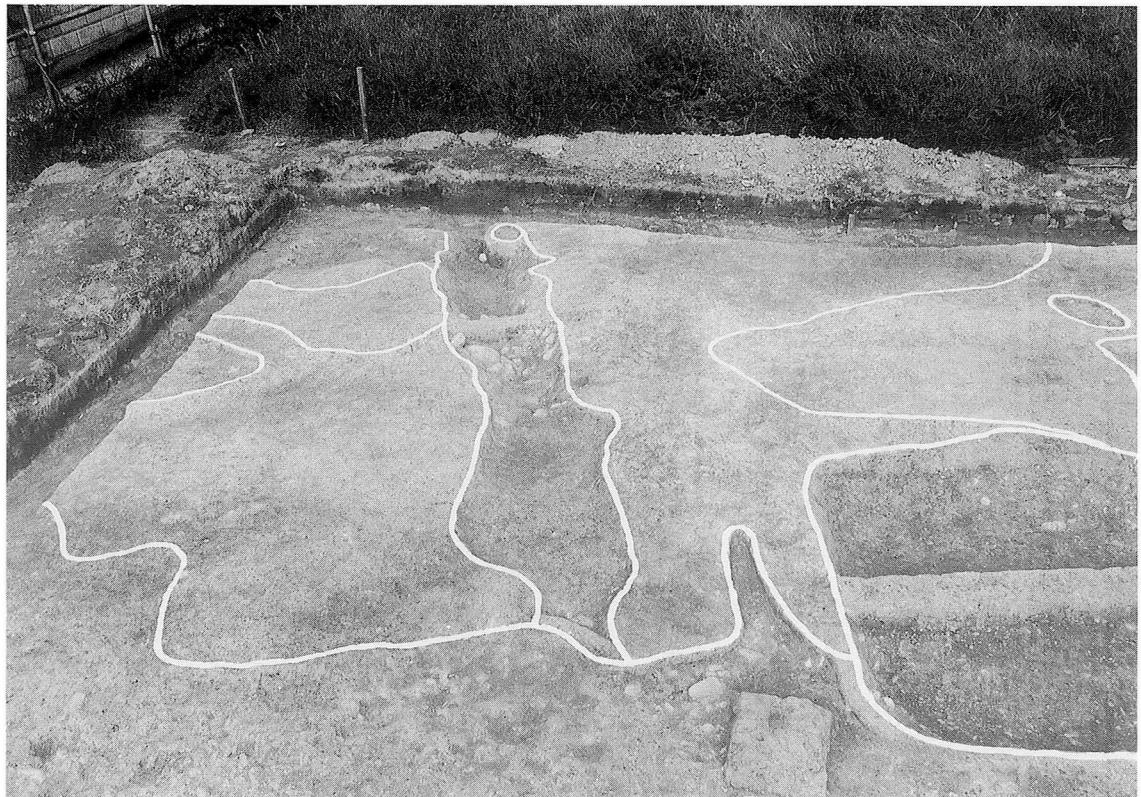
北西より



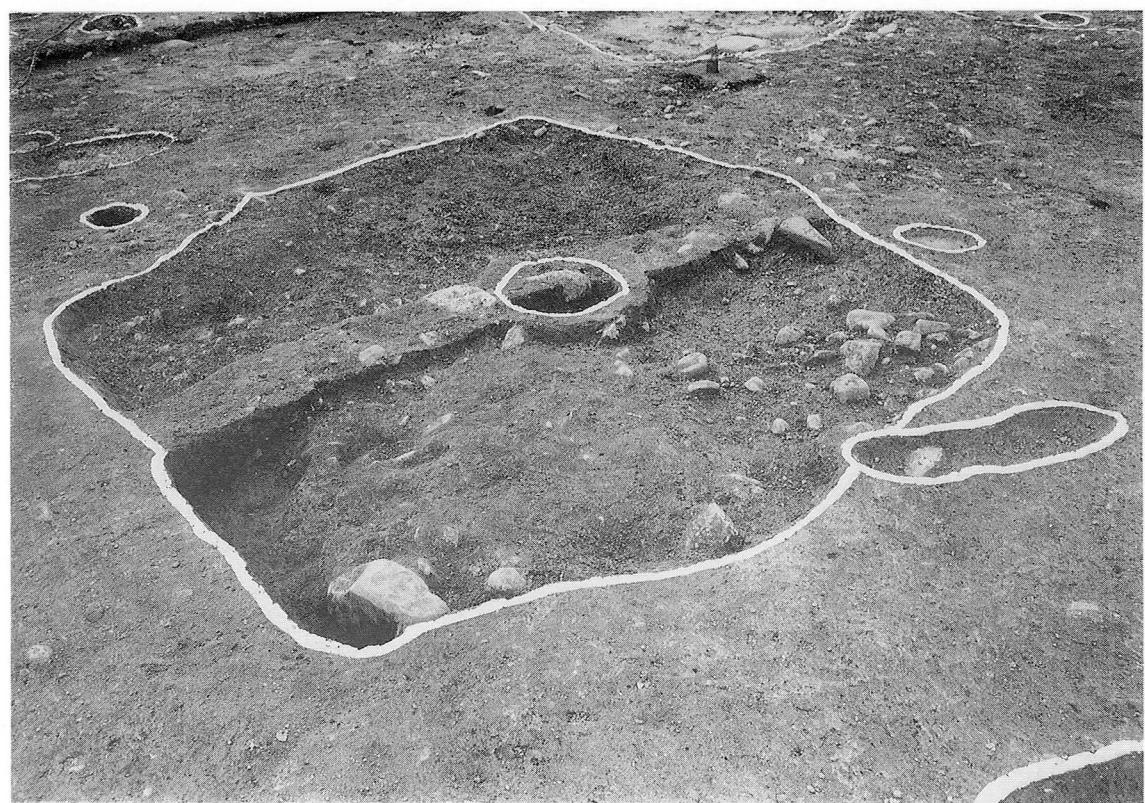
2. 同上

北より

図版 8 検出遺構



図版9 検出遺構



1. SX-213

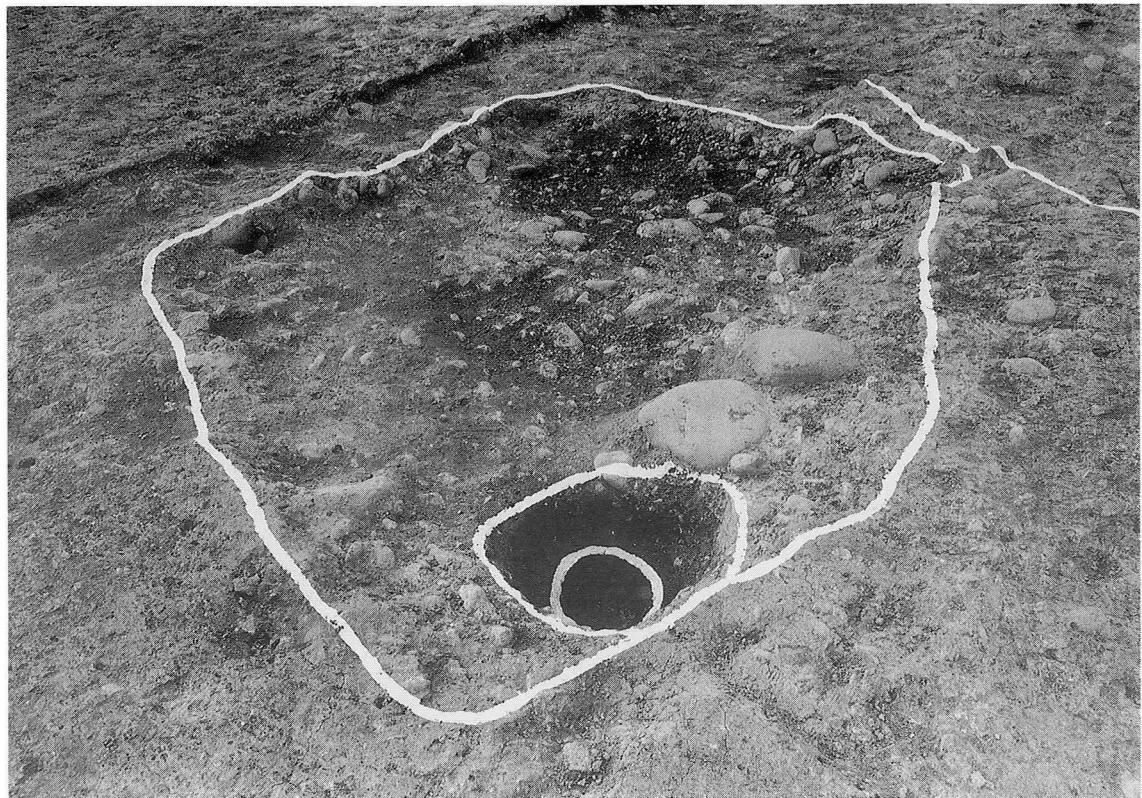
東より



2. SK-201

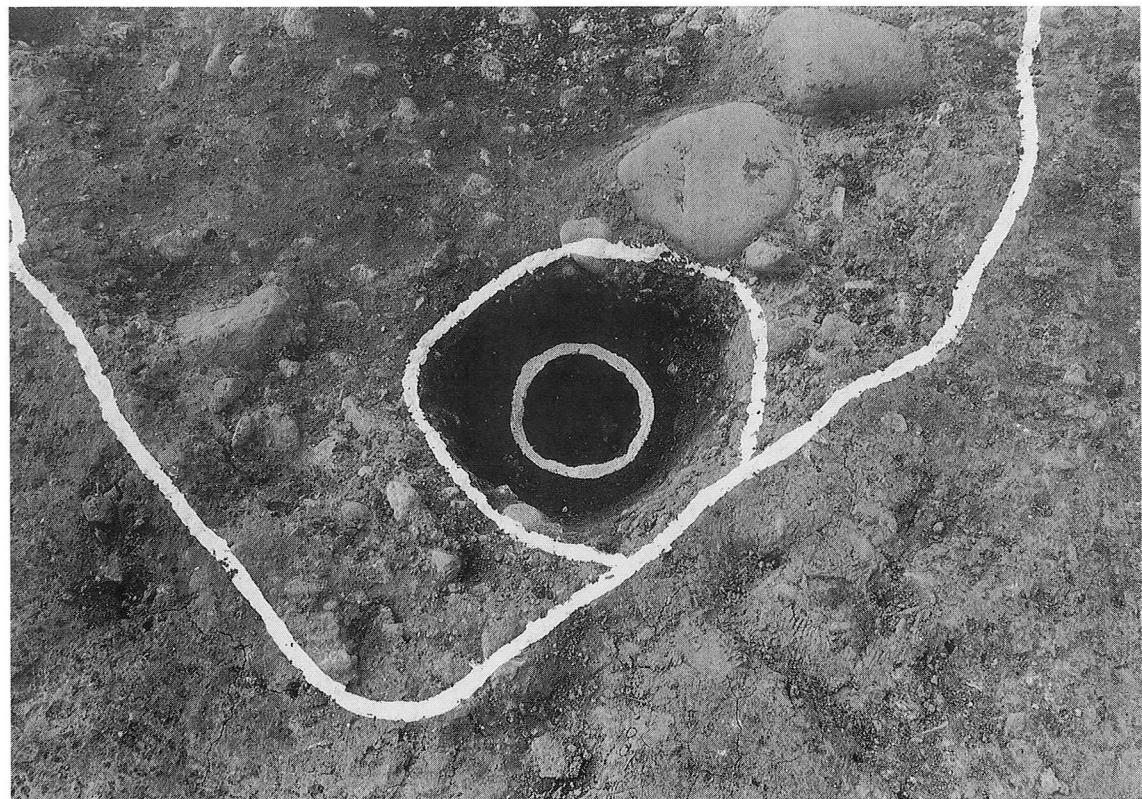
西より

図版 10 検出遺構



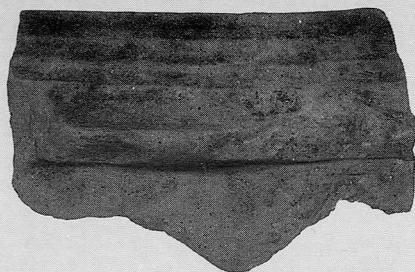
1. SX-210, Pit-204

東より

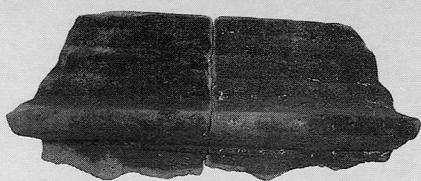


2. Pit-204

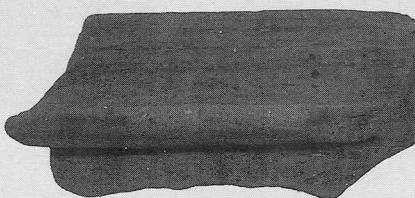
図版11 出土遺物



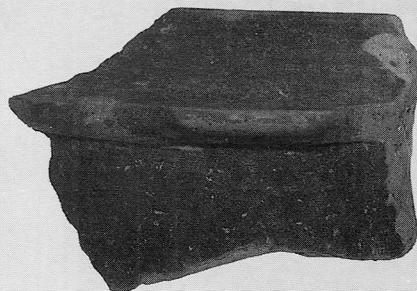
1



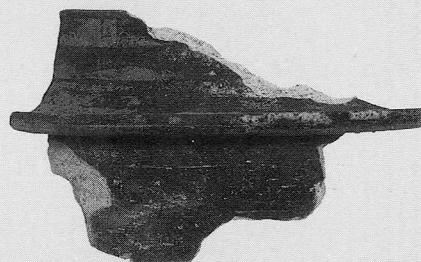
2



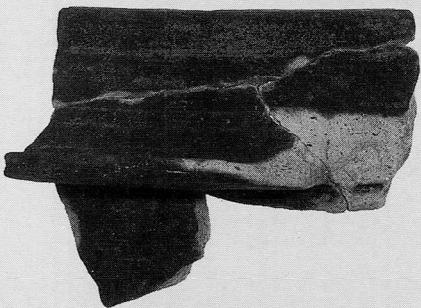
3



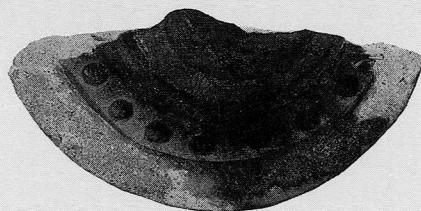
4



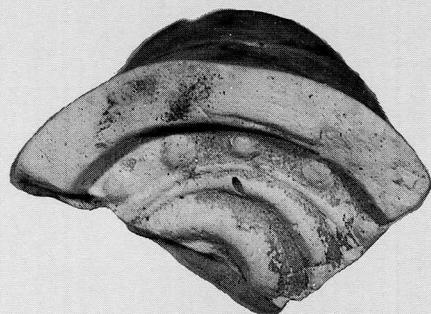
5



6



7

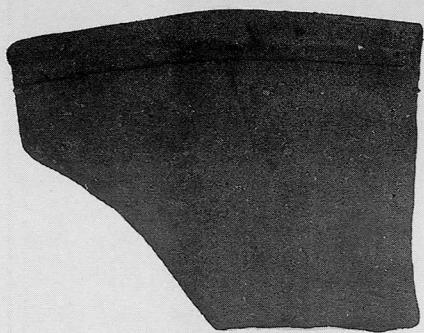


9

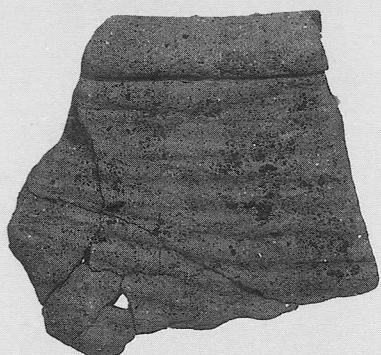
図版12 出土遺物



16



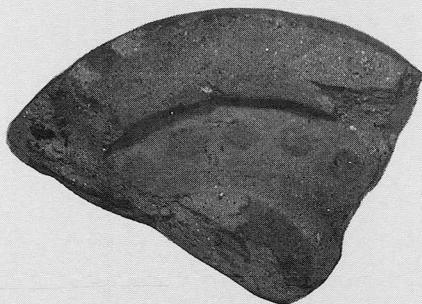
40



19



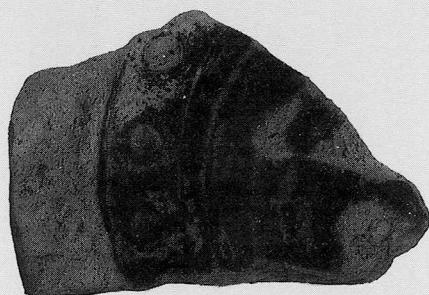
31



26



8

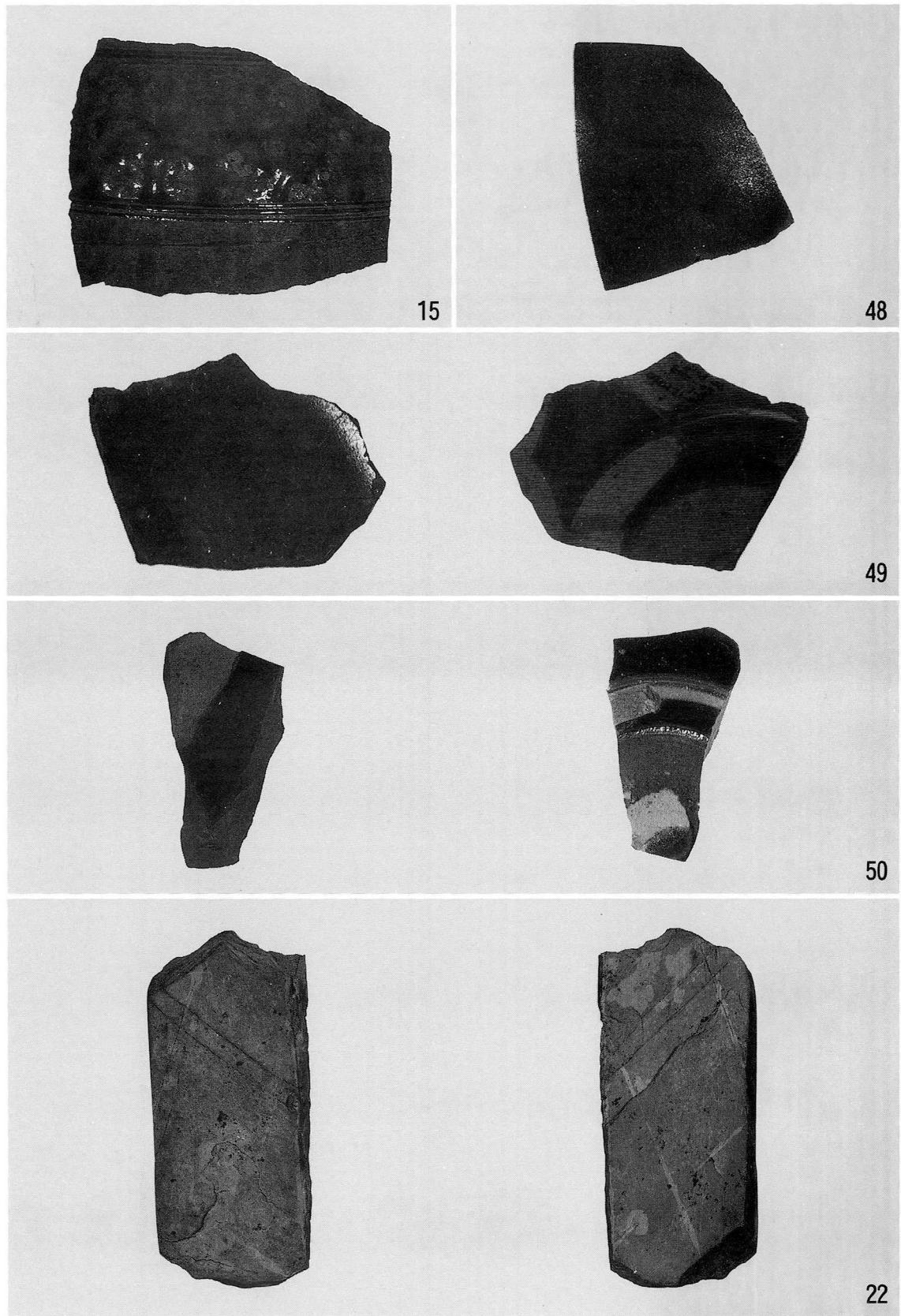


62



63

SE-201(8), SD-201(40), SD-202(16,19,62), SD-203(26,63), SX-202(31) 出土遺物



SE-201(50), SD-202(15,22), SD-203(49), 包含層第2層(48) 出土遺物

貝塚市埋蔵文化財調査報告 第31集

## 木積観音寺跡発掘調査概要

発行日 1993.9.30

編集・発行 貝塚市教育委員会

貝塚市畠中1丁目17番1号

印 刷 摂河泉文庫(貝塚市北町20-18)